

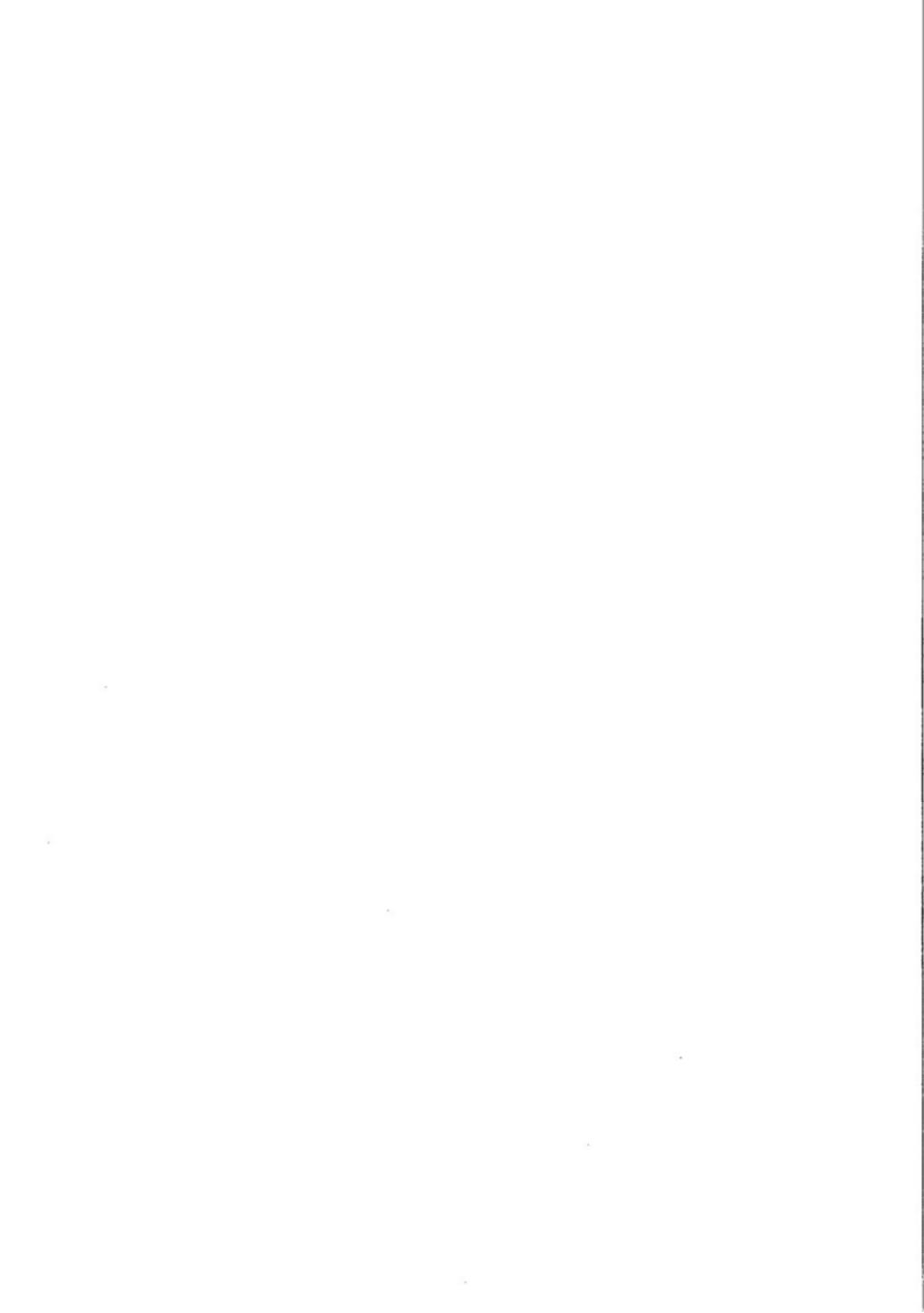
田井中遺跡

第19次調査

－府道八尾道明寺線道路拡幅事業に伴う発掘調査報告－

2007年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



田井中遺跡

第19次調査

—府道八尾道明寺線道路拡幅事業に伴う発掘調査報告—

2007年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



周溝墓A101全景(西から)



SKA101土器出土状況(西から)

はしがき

大阪府の東部を画する八尾市は、東に綴豊かな自然を残す生駒山地西麓部と、その西側に広がる河内平野の中心部に位置します。このような地形環境を有する本市の歴史は古く、市域の南端に所在する八尾南遺跡では、旧石器時代に遡る遺物の出土が知られています。一方、市域の大部分を占める平野部では、今から2300年前の弥生時代前期から、水田経営を基盤とした集団の生活の痕跡が散見され始めます。以後各時代を生きた先人たちには、度重なる洪水の危険に怯えながらも、それに起ち向かい、この肥沃な土壤を手放すことはありませんでした。近世に至るまで、連綿と集団生活の痕跡が残されているのはそのためです。近年は、旧国鉄竜華操車場跡地において大規模な都市開発が進行しているほか、市民の保健・衛生の向上を図る為、公共下水道の普及にも力を注ぎ、自然と都市型空間との共存を図りながら、今尚発展をし続けています。

この度、平成16~18年度に実施した田井中遺跡第19次発掘調査の整理が完了しましたので、これらをまとめ報告書として刊行します。この調査では、弥生時代中期と古墳時代前期の墓を検出したほか、弥生時代前~中期、古墳時代中期~近世にかけての、何層にも重なる水田耕作土を確認しました。

このように地中には、私たち現代人が思いもよらぬ自然環境・歴史環境が埋もれています。しかしながら今も市域のどこかで、市民生活の利便性を図るために開発が行われ、それと同時に、先人が残してくれたかけがえのない文化財が破壊されていることもこれまた事実です。

文化財は一度破壊されると、二度と元には戻りません。今後とも埋蔵文化財の保護、および否応なく破壊されていく埋蔵文化財に対して、発掘調査を行い、歴史を記録・保存し、未来に伝承していくという、私たち(財)八尾市文化財調査研究会の活動により、層のご理解・ご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

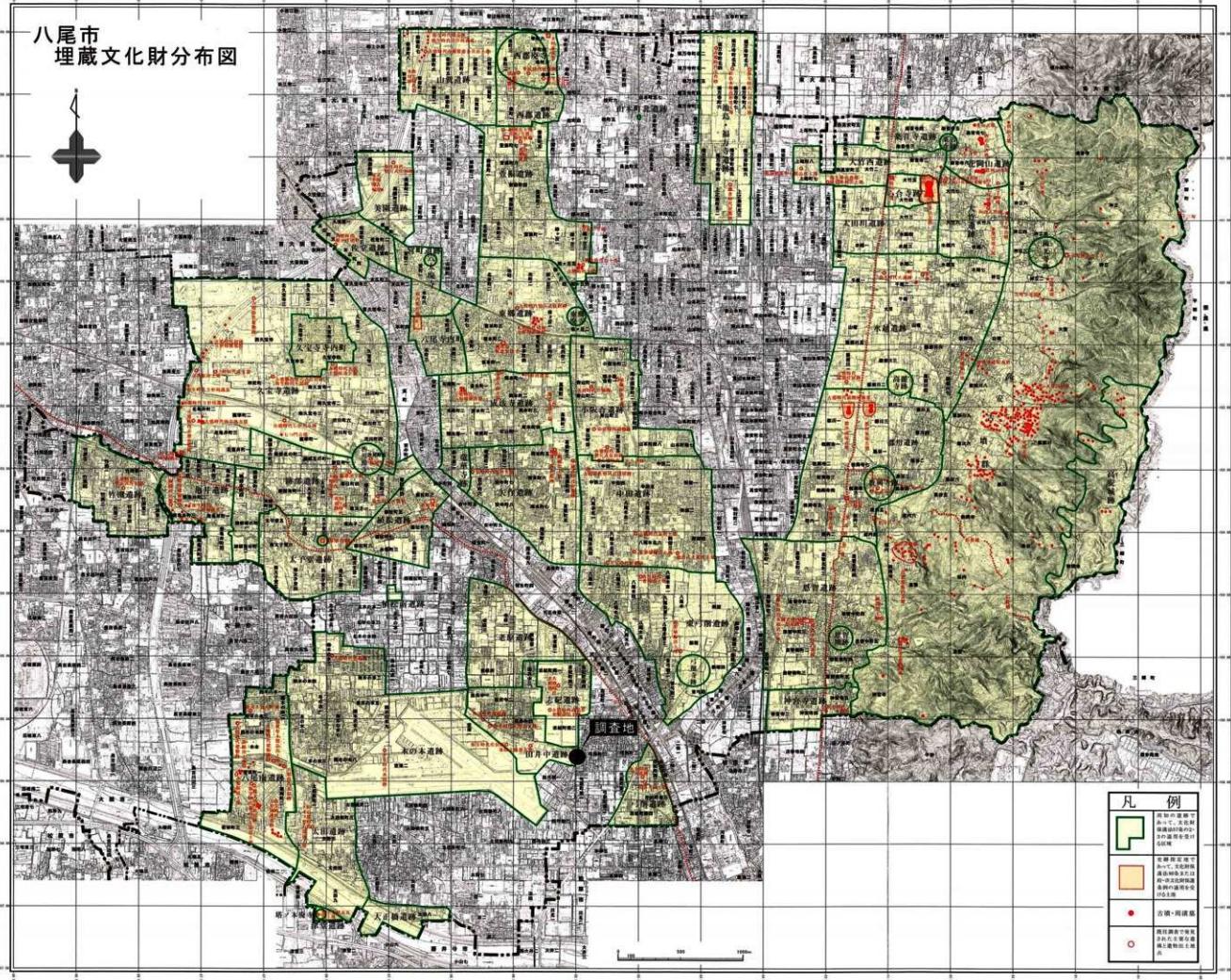
最後になりましたが、一連の発掘調査に対してご協力いただきました関係諸機関の皆様に感謝するとともに、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

財團法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎健

八尾市 埋蔵文化財分布図



序

1. 本書は、大阪府八尾市空港1丁目81-2で実施した一般府道八尾道明寺線道路拡幅事業に伴う発掘調査(1～3工区)の報告書である。
1. 本書で報告する田井中遺跡第19次(T N 2004-19)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪府八尾土木事務所から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成16年12月21日～平成18年8月31日(1工区: 平成16年9月29日～平成17年5月31日 2工区: 平成17年3月16日～平成18年1月31日 3工区: 平成18年6月12日～平成18年8月31日)にかけて、樋口 煉を調査担当者として実施した。調査面積は約842.6m²(1工区: 327m² 2工区: 469.5m² 3工区: 46.1m²)である。
1. 現地調査では、米田敏幸氏、別所秀高氏に、本調査地にまで何度も足を運んでいただき、遺構や遺物、地層の解釈をはじめ、貴重なご意見を頂戴した。記して感謝の意を表します。
1. 現地調査にあたっては、青山 洋・市森千恵子・岩本順子・國津れいこ・鈴木裕治・曹龍・竹田貴子・西口佳奈・細谷利美・實樹婦美了・山名康子の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成18年12月29日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－市森・岩沢玲子・國津・田島宣子・張 益芬・徳谷尚子・中村百合・藤中貴子・細谷・實樹・岡面トレースー市森、デジタルトレース－青山・樋口・山名、写真撮影－青山・樋口・山名・写真編集－青山・岡内洋平・樋口・山名、本書の執筆及び編集－樋口が担当した。
1. 調査では、写真・カラースライド・実測図を多数残した。各方面で幅広く活用されることを希望する。

凡　例

1. 本書で用いた地図は、大阪府八尾市発行の2500分の1地形図(平成8年7月発行)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成13年度版)を使用した。
1. 本書で用いた方位は四十七座標第VI系(旧座標)の座標北を示す。
1. 本書で用いた標高はすべてT. P. 値(東京湾標準潮位)である。
1. 遺構の一部については下記の略号で示した。
土坑 - SK 溝 - SD 柱穴 - SP 流路 - NR
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
弥生土器・古式土師器・土師器・埴輪・木製品・石製品・白須恵器・黒
1. 土色・遺物の色調は、『新版標準上色帖1998年版』農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色盤監修を用いた。
1. 本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は、すべて一致する。

本文目次

はしがき	
八尾市埋蔵文化財分布図	
序	
凡例	
第1章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	6
第1節 調査に至る経緯	6
第2節 調査の経過	6
第3章 調査の方法	7
第4章 A区の調査成果	8
第1節 基本層序	8
第2節 検出遺構と出土遺物	12
第5章 B区の調査成果	38
第1節 基本層序	38
第2節 検出遺構と出土遺物	41
第6章 C区の調査成果	53
第1節 基本層序	53
第2節 検出遺構と出土遺物	53
第7章まとめ	57

挿図目次

第1図 調査地周辺図	3
第2図 調査区位置図	7
第3図 A区基本層序断面図	9・10
第4図 A区第1・2面平面図	13・14
第5図 崛溝墓A101平面図	15
第6図 崛溝墓A101断面図	16
第7図 崛溝墓A101 西堀溝・主体部A101断面図	17
第8図 崛溝墓A101出土遺物	18
第9図 土器棺墓A101平・断面図	19
第10図 土器棺墓A101出土遺物	20

第11図	周溝墓A101周溝内出土遺物	21
第12図	S KA101平・断面図	22
第13図	S KA101出土遺物 1	23
第14図	S KA101出土遺物 2	24
第15図	S KA101出土遺物 3	25
第16図	S KA101出土遺物 4	26
第17図	S KA102・103平・断面図	27
第18図	S KA102・103・SDA103出土遺物	28
第19図	SDA102~104断面図	28
第20図	S KA201平・断面図・出土遺物	29
第21図	S KA202平・断面図・出土遺物	30
第22図	SDA202~204断面図	31
第23図	NR A202・204出土遺物	32
第24図	SDA301断面図・出土遺物	33
第25図	第1A~第4A層内出土遺物 1	34
第26図	A区第3・4面平面図	35・36
第27図	第1A~第4A層内出土遺物 2	37
第28図	B区基本層序断面図	39・40
第29図	SKB101・102平・断面図	42
第30図	B区第1~3面平面図	43・44
第31図	SKB102出土遺物	45
第32図	SDB101平・断面図	46
第33図	SDB101出土遺物	47
第34図	SKB201・202断面図	47
第35図	SDB201断面図	48
第36図	水IH B207・213・227・235断面図	48
第37図	SKB301~304断面図	49
第38図	SDB301・302断面図	50
第39図	SKB305・SDB303・304断面図	50
第40図	SPB301~306平面図(S=1/100)・断面図(S=1/40)	50
第41図	水III B320断面図	51
第42図	B区地層内出土遺物	52
第43図	C区基本層序模式図	54
第44図	C区第3面平面図	56
第45図	SDC301断面図	56
第46図	C区地層内出土遺物	57

表 目 次

表 1 既往調査・観察表 1	4
表 2 既往調査・観察表 2	5

卷頭図版目次

周溝墓 A101全景(西から)
SKA101土器出土状況(西から)

図 版 目 次

図版 1 A区周辺状況(南西から) A区全景(南西から)	
図版 2 周溝墓 A101全景(北西から) 西周溝：左・主体部 A101：右(南から) 主体部 A101断面(南から) 西周溝断面(南から) 東周溝断面(西から)	
図版 3 土器棺墓 A101掘形検出状況(南から) 土器棺墓 A101土器棺出土状況(北から) 土器棺墓 A101土器棺出土状況(東から)	
図版 4 土器棺墓 A101棺蓋除去後棺身精査状況(東から) 上器棺墓 A101棺身精査状況(北から) 土器棺墓 A101棺身内埋土除去状況(北から) 上器棺墓 A101棺身内埋土除去状況(北東から) 土器棺墓 A101完掘状況(北から)	
図版 5 SKA101検出状況(南から) SKA101遺物出土状況(1段目：南から) SKA101遺物出土状況(4・5段目：南から)	
図版 6 SKA101遺物出土状況(1段目：南東から) SKA101遺物出土状況(1段目：北東から) SKA101遺物出土状況(3段目：北から) SKA101遺物出土状況(4・5段目：南西から) SKA101遺物出土状況(5段目：北から) SKA101遺物出土状況(6段目：西から) SKA101完掘状況(南から) SKA101測量風景(北東から)	
図版 7 SKA102(南から) SKA103(北西から) SDA104(南東から)	
図版 8 SKA201(北から)	

- S K A 202(北東から)
S D A 203(南東から)
- 図版9 N R A 204(北から)
S D A 301(南東から)
N R A 401(北西から)
- 図版10 第2A・第3A層(西から) 第1A～第5A層、N R A 203、第9A～第11A層(北西から)
N R A 201(南西から) 第3A～第15A層(北西から)
第3A層～N R A 401(北西から) 第3A層～N R A 401(西から)
第3A層～N R A 401(南西から) 第8A層～第15A層、N R A 401南層(西から)
- 図版11 A区出土遺物 周溝墓A101・土器棺墓A101
- 図版12 A区出土遺物 S K A 101
- 図版13 A区出土遺物 S K A 101
- 図版14 A区出土遺物 S K A 101
- 図版15 A区出土遺物 S K A 101
- 図版16 A区出土遺物 S K A 201・202・N R A 202・204
- 図版17 A区出土遺物 第1A～第4A層
- 図版18 B区周辺状況(南から)
B区周辺状況(北から)
- 図版19 S K B 101・102(南西から)
S K B 101(南東から) S K B 102(西から)
S D B 101(南西から) S K B 102木製品出土状況(西から)
- 図版20 S K B 201(南西から)
S K B 202(南西から)
S D B 201(南西から)
- 図版21 B区第2面水田検出状況(北から)
水田B213(南から)
水田B227断面(南東から)
- 図版22 S K B 305(南東から)
S K B 305・S D B 303・304(南東から)
S D B 304断面(南東から)
- 図版23 S P B 301～306(北から)
S P B 301～306(北東から)
S P B 305断面(南から) S P B 306断面(南から)
- 図版24 B区第3面水田検出状況(南から)
水田B320(南から)
水田B320断面(南西から)
- 図版25 B区北端西壁断面第1B～第5B層(東から)
B区南端西壁断面第2B～第5B層(東から)

西壁断面第7B～第9B層(東から)

図版26 B区出土遺物 SKB102・SDB101

図版27 B区出土遺物 第5B層・第8B～第10B層

図版28 B区出土遺物 第8B～第10B層

図版29 B区出土遺物 第8B～第10B層

図版30 C区第1面検出状況(北から)

C区第2面検出状況(北から)

C区第3面検出状況(北から)

図版31 東壁断面第6C・第7C層(北西から)

東壁断面第7C・第8C層(北西から)

東壁断面第8C～第14C層(南西から)

図版32 SDC301(北西から)

断面実測風景(北西から)

C区周辺状況(南東から)

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する柏原市役所付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画された低地である。この平野は、旧大和川の主流(恩智川・玉串川・楠根川・長瀬川・平野川)と分流がもたらす沖積作用により、自然堤防や後背湿地などのヒトの営みには必要不可欠な自然地形を形成しながら、その姿を幾度か変えつつ現在に至る。この平野の東部を画する八尾市は、東側を奈良県、西側を大阪市、北側を東大阪市にそれぞれ隣接し、また南側は、1704年以降その流れを西へと転じた現大和川を境界として、松原市、藤井寺市、柏原市に接している。

今回報告する田井中遺跡は、本市の南部、現在の行政区画では、田井中1～4丁目、志紀町西2丁目、空港1丁目の東西約900m、南北約900mがその範囲である。地形的には、旧大和川の主流である長瀬川の左岸、平野川の右岸に形成された沖積地上に立地する。現地表面高を見ると、遺跡南東端がもっとも高く標高12.3m前後、北西端がもっとも低く標高10.1m前後を測り、比高差は約2.2mである。したがって、概ね南東から北西方向に傾斜する地勢を有している。

第2節 歴史的環境

田井中遺跡は、昭和50(1975)年に陸上自衛隊八尾駐屯地内で行われた下水道工事の際、弥生土器が出土したことによりその存在が確認された。その後、当研究会による本格的な発掘調査が昭和57(1982)年に実施されたのを端緒に、今日に至るまで大阪府教育委員会、(財)大阪府埋蔵文化財協会、(財)大阪府文化財調査研究センター、八尾市教育委員会、当研究会による多次に亘る調査が、主に遺跡の南西～南部において実施してきた。その結果、縄文時代晩期以降の複合遺跡として周知されるようになった。特に遺跡の南西部(駐屯地西部)では、弥生時代前～中期の居住域、墓域を構成した遺構群をはじめ、これらに伴う遺物が多量に出土しており、当該期の集落の中心がこの付近に展開した可能性を示唆する結果として特筆される。

本遺跡の周辺は、類似した地形環境が形成されており、数多くの遺跡が密集している。北には老原遺跡(古墳時代後期以降)や奈良時代の瓦が出上した五条宮跡が見える。北東には志紀遺跡(縄文時代後期以降)が接する。ここでは、主に弥生時代前期以降、水田耕作を中心とした牛・馬関連遺構を連続と検出したことで注目を集めた。特に弥生時代中期初頭～古墳時代前期にかけては、広義において居住域の田井中遺跡、生産域の志紀遺跡として、密接に関わりながら遺跡を形成しているものと推測される。一方東には長瀬川を挟んで弓削遺跡や東弓削遺跡が対峙する。この内、弓削遺跡(弥生時代中期以降)では、弥生時代後期の遺物を多量に出上した大溝(西村1985)をはじめ、東部瀬戸内地域からの搬入品を含む多量の土器が出上した井戸や溝を検出(猪2000)し、柏原市本郷遺跡とともに当該期の居住域を形成していた可能性が高くなった。また、古墳時代後期の埴輪片も出土しており(藤井1999・高萩2002)、周辺において埋没古墳が存在する可能性が高い。東弓削遺跡(弥生時代中期以降)では、弥生時代後期～古墳時代初頭の居住域に伴う遺構・遺物を検出したほか、古墳時代中～後期の埴輪片も出土、弓削遺跡同様、当該期の埋没古墳の存在を垣

間見ることができる。さらに奈良～平安時代に比定される瓦も多量に出土した(潜2000)ことから、付近に当該期の古代寺院が存在する可能性が高く、注目される。南～西にかけては広範囲に木の本遺跡(弥生時代前期以降)が展開する。ここでは、遺跡の西部に位置する南木の本3丁目付近を中心に、弥生時代中期前半・古墳時代初頭前半～後半・古墳時代前期前半・古墳時代中期・平安時代後期の居住域を形成した可能性の高い遺構・遺物を重層的に検出した。一方、田井中遺跡に近い空港1丁目付近を中心とする遺跡東部では、弥生時代前期の居住域や墓域に伴う遺構・遺物を確認した。しかし、それ以後は遺構・遺物の検出は認められるものの、相対的には希薄であり、僅かに古墳時代前期の墓域に関連する可能性の高い遺構・遺物が検出されたに留まる。中世以降は、田井中遺跡や志紀遺跡と同様、生産域として利用される。

次に、田井中遺跡について時代毎に概観していく。

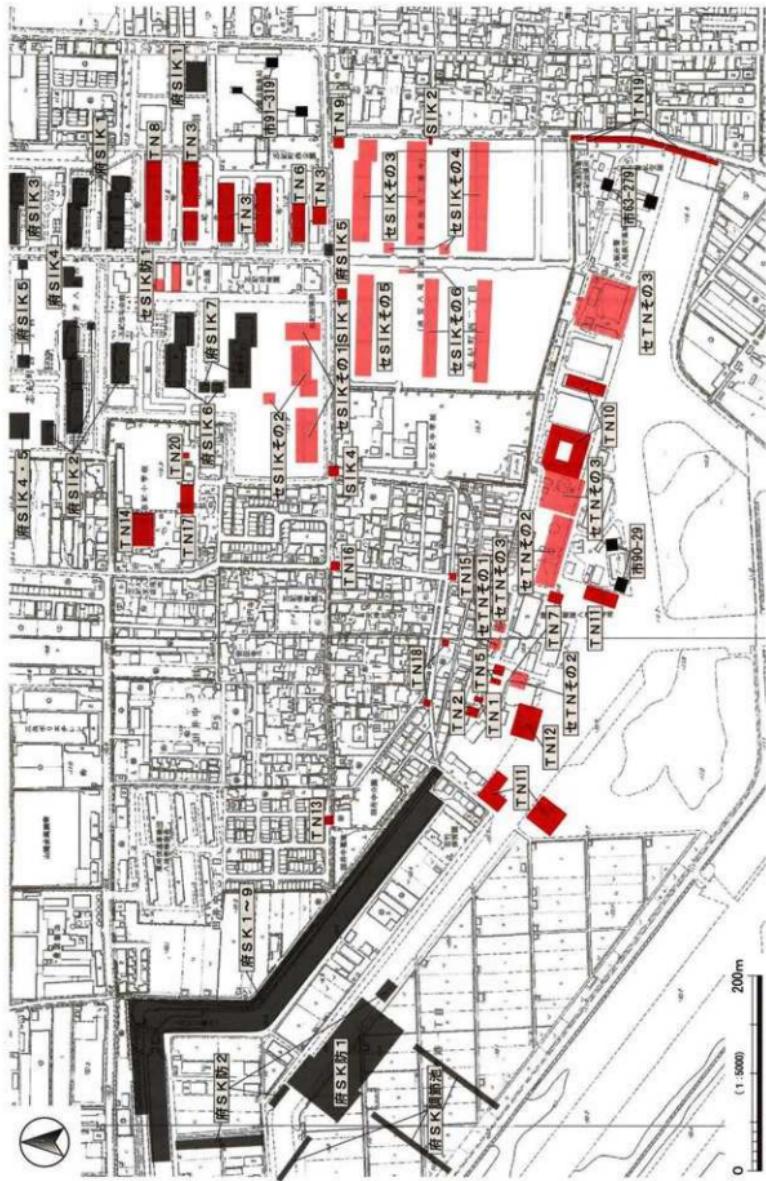
縄文時代：本遺跡の北西端、木の本遺跡と接する地点で行われた八尾空港外濠・平野川の改修工事に伴う調査(府SK1～9)では、縄文時代晩期の居住域を構成する遺構・遺物の出土を見た。これが、本遺跡における先人が残した最も古い生活の痕跡である。当該期の集落は本遺跡北西部、木の本遺跡東部、さらには老原遺跡南西部にまたがって展開していた可能性が高い。

弥生時代：その後弥生時代に入ると、前期中段階において、遺跡南西部(セTNその2)に本格的な居住域を形成、その後新段階には、明瞭な遺構の検出は無いものの、多量の遺物の出土を見たことから勘案すると、中心を若干南東に移動しつつ、引き続き集落が営まれたことが予測される。一方遺跡南東部(セTNその3)では、方形周溝墓を検出したことから、墓域として利用していた可能性が考えられる。中期に入ると、やはり遺跡南西部(セTNその2)において前半に属する堅穴住居をはじめ、井戸や土坑など居住域を構成する遺構・遺物が多く検出される。また木棺墓からなる墓域も確認された。一方後半については、遺構・遺物の検出はほとんど無くなる。後期に入ると、遺構・遺物の検出は散在的になる。

古墳時代：前期では、遺跡南西部(セTNその2)で掘立柱建物を中心とした居住域が形成される。また、井戸から出土した舟形土製品や、地層内から出土した珠文鏡は、祭祀に伴う遺物として特筆される。中期に入ると、遺跡南西部では遺構・遺物が希薄になるが、その反面、遺跡南東部(セTNその2・3)において掘立柱建物や土坑、溝などの居住域を構成する遺構が検出される。これらの遺構は、主軸を北西方向に有することが特徴的であり、志紀遺跡で検出された当該期の水田の主軸と合致する点も注目に値する。付近一帯を規制するような制約が存在した可能性も指摘されている(駒井1997)。後期以降は、概ね水田耕作を中心とした生産域として利用されるようだ。

古代～近世：遺跡全域で遺構・遺物の検出が少ない。志紀遺跡とともに、水田耕作を中心とした生産域として機能していくものと思われる。条里制区画の開始は、志紀遺跡の成果から奈良時代中～後半頃と考えられ(市村2002)、それ以後は、整然と区画された水田が広がっていたと推測される。

近代～現代：長閑な田園地帯において、昭和13(1938)年、民間パイロット養成学校『阪神飛行学校』が設立され、田井中遺跡内に東西810m、南北525mの芝張りの滑走路が造成された。八尾空港の前身である『大正飛行場』である。その後、昭和15(1940)年には、帝国陸軍により無条件に接取され、2木の舗装滑走路を有する総面積298haの飛行場に生まれ変わった。太平洋戦争終戦後、当飛行場は『阪神飛行場』と改名され、アメリカ進駐軍に接取されていたが、昭和29(1954)年



第1圖 調查地周邊圖

表1 既往調査一覧表1

調査名	地図番号	調査名(略号)	調査地番	面積(㎡)	調査機関	備考	文獻
志紀遺跡	西91-319	志紀91-319	志紀町西3丁目12番地	25	市教委	古墳～中世・木田	吉川野方 1992「志紀遺跡(91-319)の調査」『八尾市文化財調査報告書』八尾市文化財調査研究会
	SIK1	志紀第1次 (SIK91-1)	志紀町西2丁目地内	52	八文研	飛文多綱(1)と飛文NFT1、 學生多綱以降と木田耕土塙	成井佳子 1991.1月「志紀遺跡(1号)」(改表記)「飛文95年 飛文多綱(1)と飛文NFT1、 學生多綱以降と木田耕土塙」 八尾市文化財調査研究会報告書
	SIK2	志紀第2次 (SIK94-2)	志紀町西2丁目地内	22	八文研	飛牛後期～中世の牟羅塙	小野義光 1996.7月「志紀遺跡(第2次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会
	SIK3	志紀第3次 (SIK96-3)	志紀町西1	40.4	八文研	古墳・縄文・木田耕作7	安田清一 1997.X月「志紀遺跡(第3次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告書60号(改)八尾市文化財調査研究会
	SIK4	志紀第4次 (SIK97-4)	志紀町西3	32	八文研	陶文土器(丸削)	津井真一 1999.7月「志紀遺跡(第4次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告書61号(改)八尾市文化財調査研究会
	府SIK1		志紀町西3	1300	府教委	木原一木田	未刊
	府SIK2		志紀町西1		府教委	上植後原～奈良一木田	樋口英人 1995「志紀遺跡後原層(奈良)」府教委作成(改) 大和府教育委員会
	府SIK3		志紀町西1・3	2357	府教委	古墳・木田	樋口英人 1996「八尾市志紀遺跡の水庭遺構」『大阪府遺産文化財研究会報告書(第21回)』(改)大阪文化財センター
	府SIK4		志紀町西1	2856	府教委	桃生～木原一木田	未刊
	府SIK5		志紀町西1	2809	府教委	桃生前原～門 墓園区 (木田遺跡中心)	山田桂一 1995「志紀遺跡墓園区概要」『大阪府教育委員会
	府SIK6		志紀町西1	2464	府教委	桃生前原～平宝一木田	西川和善嗣 1992「志紀遺跡跡跡調査概要」(2) 大阪府教育委員会
	府SIK7		志紀町西1	2261	府教委	桃生中原～平宝一木田	守田廣義郎 1995「志紀遺跡跡跡調査(第III)」大阪府教育委員会
	セSIKその1		志紀町西1		センター	桃生中原～大原野、佐久一木田 ～猪籠～木田	木本心一・佐野 俊輔 2005「(財)大阪府文化財調査研究センター・調査報告書第25集 志紀遺跡(その2・3・5・6)」 大阪府安八尾市佐野町猪籠～木田遺跡に付する発掘記録と報告書(改)『(財)大阪府文化財調査研究センター』
	セSIKその2		志紀町西1		センター	桃生～建生 水田遺構	西川和善嗣 1995「志紀遺跡跡跡調査(第II)」大阪府教育委員会
	セSIKその3		志紀町西2		センター	桃生～猪籠～木田遺構	西川和善嗣 1995「志紀遺跡跡跡調査(第II)」大阪府教育委員会
	セSIKその4		志紀町西2		センター	陶文地形～奈良西川、御生 中原～平宝一木田	森嶋二郎・市川實太郎 1998.5「(財)大阪府文化財調査研究センター・調査報告書第26集 志紀遺跡(その4)」大阪府志紀遺跡跡跡調査に付する発掘記録と報告書(改)『(財)大阪府文化財調査研究センター』
	セSIKその5		志紀町西2		センター	桃生～建生 水田遺構	木間元彌・佐野 茂雄 2002「(財)大阪府文化財調査研究センター・調査報告書第27集 志紀遺跡(その2・3・5・6)」 大阪府安八尾市佐野町桃生～木田遺跡に付する発掘記録と報告書(改)『(財)大阪府文化財調査研究センター』
	セSIKその6		志紀町西2		センター	桃生～建生 水田遺構	木間元彌・佐野 茂雄 2002「(財)大阪府文化財調査研究センター・調査報告書第28集 志紀遺跡(その2・3・5・6)」 大阪府安八尾市佐野町桃生～木田遺跡に付する発掘記録と報告書(改)『(財)大阪府文化財調査研究センター』
	セSIKその7		志紀町西2	457.5	センター	古墳中原～後原 水田、 平安末～縄文・木田	細井佐了・鶴見正和・木原一木田 1997.1月「大阪府 志紀町後原(457.5)の調査」(改)「(財)大阪府文化財調査研究センター・調査報告書第29集 志紀遺跡(その2・3・5・6)」 大阪府安八尾市志紀町後原(457.5)の上原・後原跡跡跡調査に付する発掘記録と報告書(改)『(財)大阪府文化財調査研究センター』
田井中遺跡	市63-278	田井中 63-278	田井町2丁目12番地	19	市教委	古墳～奈良層	木田敏行 1997.5月「(改)八尾市 田井中遺跡(63-278)の調査」『八尾市 文化財調査研究会報告書』八尾市田井中遺跡(63-278)年度調査報告書改訂版 第Ⅱ回 市立農業試験場会員会
	市90-29	田井中 90-29	安治1丁目1番地	23.6	市教委	桃生～新安～木田	木田野方 1991「(改)田井中遺跡(90-29)の調査」『八尾 市文化財調査研究会報告書』八尾市内遺跡平成2年度調査報告書 安治1号 『八尾市立農業試験場会員会』(改)八尾市立農業試験場会員会
	TN1	田井中第1次 (TN82-1)	田井中無地	34	八文研	時原下原～木田	木田野方 1991「(改)田井中遺跡(90-29)の調査」『八尾 市文化財調査研究会報告書』八尾市内遺跡平成3年度調査報告書 安治1号 『八尾市立農業試験場会員会』(改)八尾市立農業試験場会員会
	TN2	田井中第2次 (TN84-2)	田井町1丁目8	165	八文研	桃生中原～木田、古墳～上 原	西村公矩 1999.2月「(改)田井中遺跡(84-2)の調査」(改)「(財)大阪府 田井中遺跡(84-2)の調査」『(財)大阪府文化財調査研究会報告書』八尾市 田井中遺跡(84-2)年度調査に付する発掘記録と報告書(改)『(財)大阪府文化財調査 研究会』

調査実施機関 市教委：大阪府教育委員会 センター：(財)大阪府福澤文化財協会を含む)
市教委：八尾市教委員会 八文研：(財)八尾市文化財調査研究会

表2 既往調査一覧表2

調査名	調査番号	調査地番	面積 (m ²)	調査・堆積	備考	文献
TN3	田井中第3次 (TN85-3)	西河町西3丁目	920	八文研 古墳・縄文・水田	佐藤信子「1994.1.10-11田井中遺跡(第19次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「八尾市内埋蔵文化財別冊調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN4	田井中第4次 (TN86-4)	大河原町西3丁目地内	1283	八文研 古墳中古～縄文～水田	佐藤信子「1994.1.10-11田井中遺跡(第19次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「八尾市内埋蔵文化財別冊調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN5	田井中第5次 (TN86-5)	西河町1丁目81	216	八文研 弥生前期～後期～二級構造・古墳中期～縄文～水田	西村公房「1995.1.10-11田井中遺跡(第19次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「八尾市内埋蔵文化財別冊調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN6	田井中第6次 (TN87-6)	西河町西3丁目	348	八文研 弥生中期～古墳前期～後期構造・古墳中期～縄文～水田	佐藤信子「1994.1.10-11田井中遺跡(第19次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「八尾市内埋蔵文化財別冊調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN7	田井中第7次 (TN87-7)	西河町1丁目81	25	八文研 弥生前期～古墳前期(布袋)～土坑	西村公房「1995.1.10-11田井中遺跡(第19次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「八尾市内埋蔵文化財別冊調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN8	田井中第8次 (TN88-8)	西河町西3丁目	996	八文研 弥生後期～縄文～水田	佐藤信子「1994.1.10-11田井中遺跡(第19次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「八尾市内埋蔵文化財別冊調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN9	田井中第9次 (TN88-9)	西河町西2丁目 1, 4-2	100	八文研 弥生中期～平成 水田耕上	佐藤信子「1993.12.1-1994.1.10田井中遺跡(第9次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「八尾市内埋蔵文化財別冊調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN10	田井中第10次 (TN89-10)	西河町1丁目18	1003	八文研 弥生前中期～土坑・溝・古墳後期～水田	西村公房「1995.1.10-11田井中遺跡(第10次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「八尾市内埋蔵文化財別冊調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN11	田井中第11次 (TN89-11)	西河町1丁目81	1865	八文研 縄文後期以降～河岸、弥生前中期～後期・土坑・溝・穴・水田	西村公房「1994.12.1-1995.1.10田井中遺跡(第11次調査)」(TN89-11)「半山5年度(第8次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「(財)八尾市文化財調査研究会」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN12	田井中第12次 (TN89-12)	西河町1丁目81	660	八文研 弥生前中期～後期・土坑・溝・古墳後期～水田	西村公房「1994.12.1-1995.1.10田井中遺跡(第12次調査)」(TN89-12)「半山5年度(第8次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「(財)八尾市文化財調査研究会」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN13	田井中第13次 (TN89-13)	田井中1丁目8	29	八文研 縄文後期～半山式窓・熱河川、北側～戸戸	西村公房「1994.12.1-1995.1.10田井中遺跡(第13次調査)」(TN89-13)「半山5年度(第8次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「(財)八尾市文化財調査研究会」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN14	田井中第14次 (TN89-14)	田井中1丁目8	600	八文研 弥生後期～溝・土坑・溝・古墳後期～後期・水田	佐藤信子「1994.12.1-1995.1.10田井中遺跡(第14次調査)」(TN89-14)「半山5年度(第8次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「(財)八尾市文化財調査研究会」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN15	田井中第15次 (TN89-15)	田井中4丁目81	23	八文研 弥生後期～河岸、水田～縄文	西村公房「1995.1.10-11田井中遺跡(第15次調査)」(TN89-15)「半山5年度(第8次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「(財)八尾市文化財調査研究会」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN16	田井中第16次 (TN89-16)	田井中4丁目内地内	7	八文研 横道遺構なし	西村公房「1995.1.10-11田井中遺跡(第16次調査)」(TN89-16)「半山5年度(第8次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「(財)八尾市文化財調査研究会」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN17	IC井中第17次 (TN89-17)	田井中3丁目191	286	八文研 弥生中期～河岸・古墳中期～水田	佐藤信子「1995.1.10-11田井中遺跡(第17次調査)」(TN89-17)「半山5年度(第8次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会委員会「(財)八尾市文化財調査研究会」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN18	西戸中第18次 (TN89-18)	西戸中4丁目内地内	42	八文研 弥生中期～小穴・溝込み状遺構	西村公房「2000.1.10-11田井中遺跡(第18次調査)」(TN89-18)「(財)八尾市文化財調査研究会委員会」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN19	田井中第19次 (TN89-19)	西河町1丁目81	862.6	八文研 本塗に複数	西村公房「2000.1.10-11田井中遺跡(第19次調査)」(TN89-19)「(財)八尾市文化財調査研究会委員会」(財)八尾市文化財調査研究会	
TN20	田井中第20次 (TN89-20)	田井中3	16	八文研 古墳中古～水田植一層	西村公房「2007.1.10-11田井中遺跡(第20次調査)」(TN89-20)「(財)八尾市文化財調査研究会委員会」(財)八尾市文化財調査研究会	
セTNその1		寺原1	141	センターライフ	佐藤信子・猪井正弘・本塗元彦・佐藤信子「1997.1月(財)大坂城文化財調査会セミナー『奈良の古墳』第2回」(財)大坂城文化財調査会セミナー『奈良の古墳』第2回	
セTNその2		寺原1	1600	センター	佐藤信子・猪井正弘・本塗元彦・佐藤信子「1997.1月(財)大坂城文化財調査会セミナー『奈良の古墳』第2回」(財)大坂城文化財調査会セミナー『奈良の古墳』第2回	
セTNその3		寺原1	4245	センター	佐藤信子・猪井正弘・本塗元彦・佐藤信子「1997.1月(財)大坂城文化財調査会セミナー『奈良の古墳』第2回」(財)大坂城文化財調査会セミナー『奈良の古墳』第2回	
本の本遺跡	府SK1～9			府教委	1991～2000「田井中遺跡発掘調査報告書」～(次)大阪府教育委員会	
	府SK防1			府教委	弥生中期～二期・溝・窓・竪溝・古墳中期～後期・水田	佐藤信子「1991.1月(財)大阪府教育委員会」(次)大阪府教育委員会
	府SK防2			府教委	弥生中期～後期・溝・窓・竪溝・古墳中期～後期・水田	佐藤信子「1991.1月(財)大阪府教育委員会」(次)大阪府教育委員会
	府SK調査			府教委	水路	

※調査機関：府教委：大阪府教育委員会 センター：(財)大阪府文化財調査研究センター(大阪府埋蔵文化財協会会員)
市教委：八尾市教育委員会 八文研：(財)八尾市文化財調査研究会

のサンフランシスコ講和条約の発効により全面返還を受け、昭和31(1956)年、「八尾飛行場」として再出発し、現在に至る。

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成16年6月15日、(財)八尾市文化財調査研究会は、八尾市教育委員会より示された府道八尾道明寺線道路拡幅事業に伴う発掘調査依頼を受理した。申請者は大阪府八尾土木事務所、申請地は八尾市空港1丁目1、81-2である。

申請地は、田井中遺跡の南東部に位置する。田井中遺跡は、先述の通り縄文時代晚期以降の複合遺跡である。特に弥生時代前～中期の居住域、墓域に伴う遺構・遺物を多く検出し、北接する志紀遺跡で検出された水田とともに、広く周知されてきた遺跡である。このような調査成果を踏まえた上で、平成16年7月30日、(財)八尾市文化財調査研究会は、八尾市教育委員会および大阪府八尾土木事務所との3者による、府道八尾道明寺線道路拡幅事業に伴う田井中遺跡発掘調査の業務協定を締結した。調査は、八尾市教育委員会の指導のもと、(財)八尾市文化財調査研究会が調査を実施する運びとなった。調査期間は、平成16年9月29日～平成18年8月31日で、調査実働日数は159日に及んだ。

第2節 調査の経過

今回の発掘調査は、当調査研究会が田井中遺跡で実施する第19次調査にあたる。調査地は、田井中遺跡の南東部に位置し、陸上自衛隊八尾駐屯地や大阪府警察航空隊、八尾市消防署旧志紀出張所の各敷地内東端に包括されていた地点に相当する。調査地は、東西幅約6m、南北長150mの規模を有し、3つの調査区に分断される。各調査区は概ね不整長方形を呈する。

調査地の調査開始直前状況については、南北に伸びる調査地の中～南部は、テニスコートや駐車場などに利用されていたが、北端に当たる八尾市消防署旧志紀出張所では建物が既存していた。

調査は、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表(T.P.+12.023～12.327m)下1.2～1.3mを機械により掘削、以下、現地表下3.7～4.2mまでの2.5～3.0m間については人力により掘削を行った。調査総面積は約842.6m²である。

調査は、平成16～18年の3年度にかけて3区(南から1～3区)に分割して実施された。調査期間は、1区：平成16年9月29日～平成17年5月31日(実働63日)、2区：平成17年3月16日～平成18年1月31日(実働79日)、3区：平成18年6月12日～平成18年8月31日(実働17日)で、総実働日数は159日を数える。

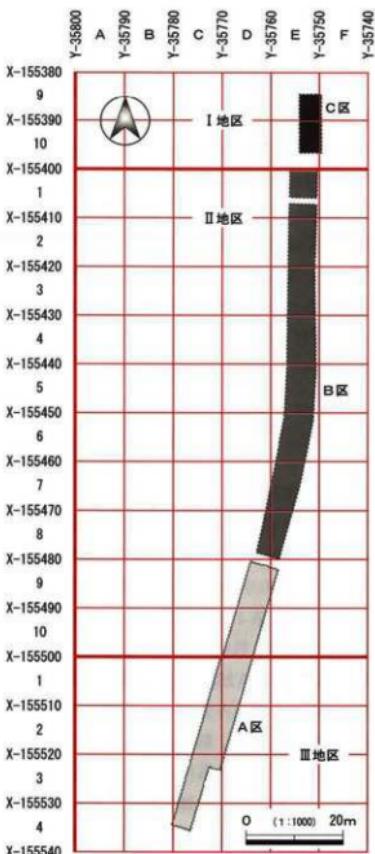
第3章 調査の方法

今回の調査は、平成16~18年の3年間にかけて3区(南から1~3工区)に分割して実施された。そこで調査では、調査が行われた工区順(1~3工区)に、A~C区と調査区名を付けている。

各調査区の平面形状と規模は、それぞれ、A区：幅4~6m、長さ約55mの南南西~北北東に長い長方形に近い不定形、B区：幅6m、長さ約70mの若干曲線を描く南北に長い長方形、C区：幅約4.5m、長さ約12.0mの南北に長い長方形である。調査総面積は約842.6m²(A区：327m² B区：469.5m² C区：46.1m²)である。

調査は、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に基づき、A区：現地表(T.P.+12.327m前後)下1.2m前後までを機械により、その後現地表下1.2~4.2mまでの3.0mについては人力により掘削、B区：現地表(T.P.+12.362m前後)下1.3m前後までを機械により、その後現地表下1.2~3.7mまでの2.5mについては人力により掘削、C区：現地表(T.P.+12.023m前後)下1.2m前後までを機械により、その後現地表下1.2~3.7mまでの2.5mについては人力により掘削し、平面的な調査を実施、遺構・遺物の検出に努めた。また、各調査区ともに、時間の許す限り、下層における遺構の有無、及び地層堆積状況の把握にも心掛けた。

調査では、遺構平面図の作成や遺物の取り上げの際、遺構・遺物の絶対的位置を示す必要が求められる。そこで本調査では、国土座標第VI系を基準に地区割りを行い、これに備えた。この地区割りは、本調査地の北西に位置する座標点(X=-155300.000m: Y=-35800.000m)を基点とし、本調査地を包括する東西100m、



第2図 調査区位置図

南北300mについて実施した。まず100m四方で区画された部分を大区画とし、北からⅠ～Ⅲ地区と呼称した。各大区画はさらに10m四方に分割し、これを小地区とした。小地区は、北西隅を基点として、東西方向をアルファベット(西からA～J)、南北方向を算用数字(北から1～10)で表し、Ⅰ A区～10 J区とした。これによると本調査区はⅠ-9 E・10 E、Ⅱ-1 E～6 E・7 D・E・8 D・E・9 D・E・10 D、Ⅲ-1 C・D・2 C・D・3 C・D・4 B・C区に包括される。

方位については、地区割り同様、国上座標第VI系に則り座標北で示した。高さは東京湾標準潮位(T.P.値)を使用した。なお、以下の報告では標高を記載する際、例外を除きT.P.±は省いた。

遺構番号については、遺構略号の後に1桁のアルファベットと3桁の算用数字で表現した。つまりアルファベットは調査区名を指し、算用数字上3桁は遺構検出面を表し、それ以下の桁で遺構の検出番号を示す。

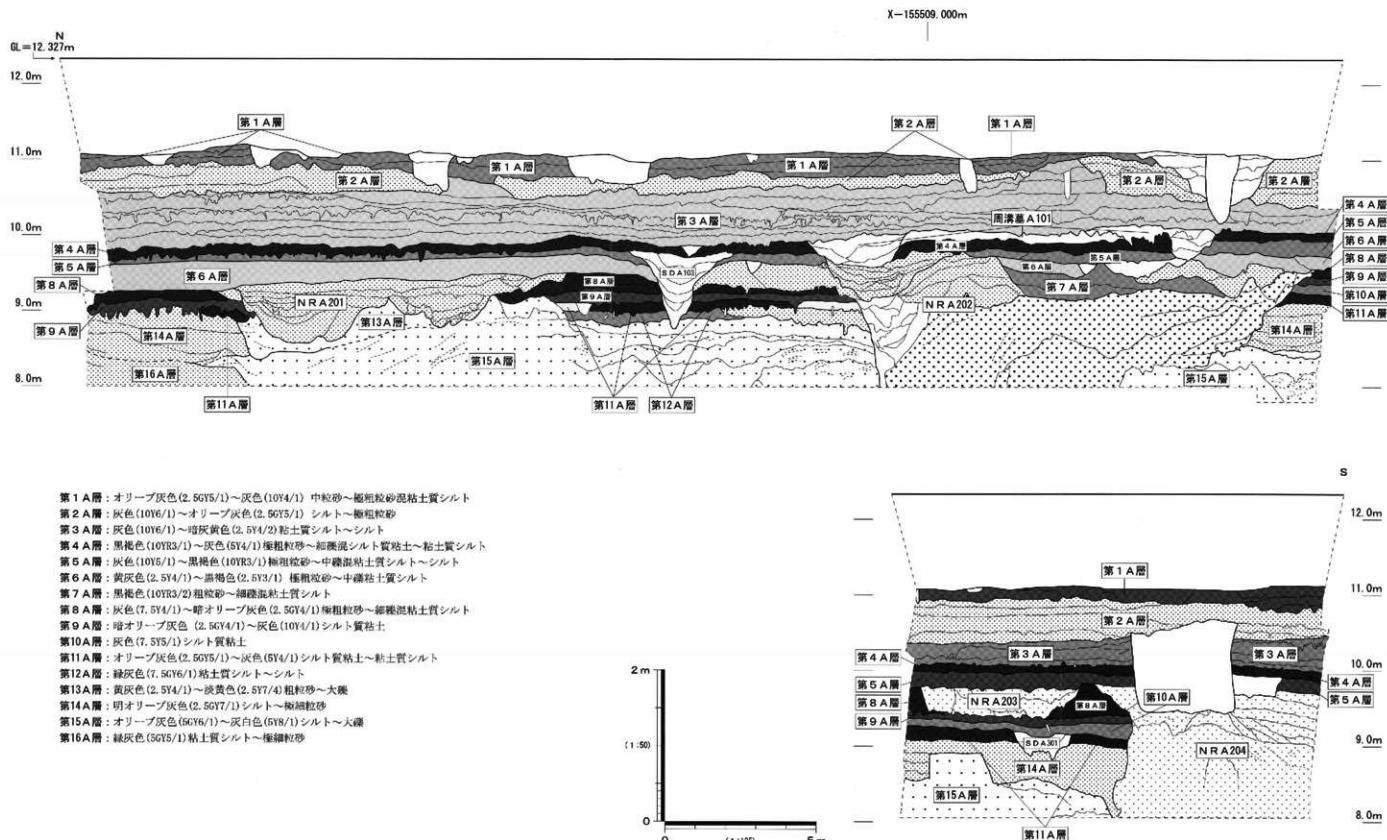
調査の結果、△区では、第1面で弥生時代中期～古墳時代前期、第2面で弥生時代中期、第3面で弥生時代前期、第4面で弥生時代前期の遺構群を検出した。B区では第1面で古墳時代中期、第2面で弥生時代中期、第3面で弥生時代前期の遺構群を検出した。C区では第3面で弥生時代前期に比定される遺構を検出した。出土遺物はコンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)13箱(A区:9箱 B区:3箱 C区:1箱)を数える。

第4章 A区の調査成果

第1節 基本層序

現地表(T.P.-12.327m)下1.2m前後までは、客土・盛土(第0 A層)。以下現地表下4.2m前後までの3.0m間で16層におよぶ基本層序を抽出した。第1 A層は近世～近代の水田耕作土である。第2 A層は最大厚0.6mを測る河川堆積物である。第3 A層は古墳時代中期～中世に比定される水田耕作土である。第4 A層は弥生時代後期～古墳時代前期の土壤化層である。第5 A～第9 A層は、弥生時代中期に形成された土壤化層である。この内、第5 A層上面において第1面を検出した。第7 A層はNRA202の土壤化部分に相当する。第8 A層上面では第2面を検出した。第10 A層は調査区の南方にのみ分布する水成層である。第11 A層は弥生時代前期の土壤化層で、本層上面が第3面に相当する。第12 A層は下位に存在する第13 A層や第15 A層といった水成層の土壤化部分に当たる。第13 A～第16 A層は、調査区全域で確認したラミナ構造の発達した水成層である。この内第13 A・15 A層は砂礫優勢層、第14 A・第16 A層はシルト優勢層である。なお、第4面は最終掘削深度において機械的に設定した調査面で、都合第15 A層内検出遺構となるが、本來は第2面検出遺構である。以下、各基本層序の概説を行う。

- 第1 A層：オリーブ灰色(2.5GY5/1)～灰色(10Y4/1)中粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト
グライ化の顕著な近世～近代の水田耕作土である。3～5cm大のブロック土が観察できる部分も存在する。層厚は約0.3m。本層は概ね4層に細分可能である。
- 第2 A層：灰色(10Y6/1)～オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト～極粗粒砂
ラミナ構造の発達した河川堆積物である。層厚は0.3～0.6mを測る。本層は、南方に向



第3図 A区基本層序断面図

かうにつれて粒度組成が粗粒化の傾向を見せ、ラミナ構造も顕著、層厚も増す。粒度組成や堆積構造の差異により數層に細分できた。

第3 A層：灰色(10Y6/1)～暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト～シルト

1～3cm大のブロック土が観察できる部分も存在するが、概ね攪拌の著しい水田耕作土である。古墳時代中期～中世に比定される。層厚は0.7m。本層は概ね8層に細分できる。各層ともに概ね平坦を成すが、一部畦畔と推測される高まりも確認した。本層は上位ほど踏み込みによる地層の乱れが顕著で、中には牛馬のものと推測される変形構造も見える。本層最下層は暗色帯を形成しており、遺物の混入も目立つ。

第4 A層：黒褐色(10YR3/1)～灰色(5Y4/1)極粗粒砂～細礫混粘土質粘土～粘土質シルト

古式上師器や炭化物の混在する土壤化層である。形成時期は概ね弥生時代後期～古墳時代前期である。層厚は約0.15m。南方ほど土壤化が著しく、色調も暗色を強く帶びる。なお、本層上面は水田耕作土である第3 A層の攪拌により削平を受けた可能性が高い。第1面で検出した周溝墓A101は本層を基盤層とする遺構の可能性が高い。

第5 A層：灰色(10Y5/1)～黒褐色(10YR3/1)極粗粒砂～中礫混粘土質シルト～シルト

弥生時代中期の土壤化層である。層厚は約0.15m。調査区の南方ほど土壤化の進行が顕著である。本層上面において第1面を検出した。

第6 A層：黄灰色(2.5Y4/1)～黒褐色(2.5Y3/1)極粗粒砂～中礫粘土質シルト

弥生時代中期の土壤化層である。層厚は0.2～0.3m。第5 A層同様、調査区の南方ほど土壤化の進行が顕著である。

第7 A層：黒褐色(10YR3/2)粗粒砂～細礫混粘土質シルト

NRA202の土壤化部分に相当する。層厚は0.1～0.2m。断面観察において、上面より切り込む一時期の流路の存在を確認した。

第8 A層：灰色(7.5Y4/1)～暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極粗粒砂～細礫混粘土質シルト

概ね調査区全域に認められる弥生時代中期の土壤化層である。層厚は約0.2m。本層上面において第2面を検出した。

第9 A層：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)～灰色(10Y4/1)シルト質粘土

弥生時代中期の土壤化層である。層厚は約0.1m。1～3cm大のブロック土が混在する。

第10 A層：灰色(7.5Y5/1)シルト質粘土

調査区の南方にのみ分布する湿地性堆積物である。第9 A層土壤化層の母材となる水成層である。層厚は約0.1m。

第11 A層：オリーブ灰色(2.5GY5/1)～灰色(5Y4/1)シルト質粘土～粘土質シルト

弥生時代前期の土壤化層(層厚約0.1m)である。本層上面において第3面を検出した。

第12 A層：緑灰色(7.5GY6/1)粘土質シルト～シルト

下位に存在する第13 A層や第15 A層といった水成層の土壤化部分に当たる。本調査区の中央付近で確認した。生物や植物の擾乱による層相の乱れが顕著である。断面観察では本層上面より切り込む一時期の流路の存在を確認した。

第13 A層：黄灰色(2.5Y4/1)～淡黄色(2.5Y7/4)粗粒砂～大礫

砂礫優勢の河川堆積物である。ラミナ構造が顕著に発達している。上方に向かうほど

に粗粒化が強くなる。

第14A層：明オリーブ灰色(2.5GY7/1)シルト～極細粒砂

シルト優勢の河川堆積物である。ラミナ構造が顕著に発達している。

第15A層：オリーブ灰色(5GY6/1)～灰白色(5Y8/1)シルト～大疊

砂礫優勢の河川堆積物である。ラミナ構造が顕著に発達している。上方に向かうほどに粗粒化が強くなる。

第16A層：緑灰色(5GY5/1)粘土質シルト～極細粒砂

シルト優勢の河川堆積物である。ラミナ構造が顕著に発達している。

第2節 検出遺構と出土遺物

第1面(弥生時代中期～古墳時代前期)

南から北に緩やかに高度を減じる第5A層上面(T.P.+9.8～9.9m付近)において、平面精査を行い、検出した遺構面である。本遺構面では、周溝墓1基(周溝墓A101)、上器棺墓1基(土器棺墓A101)、土坑3基(SKA101～103)、溝4条(SDA101～104)を検出した。上記の遺構の内、土器棺墓A101以外は、遺構構築層を第4A層に求められる。また各遺構の分布を見ると、溝以外は、調査区の中～南部の標高の高い地点において検出されたことが特筆される。

周溝墓A101

III-1C・D・2C・D区検出の周溝墓である。本周溝墓は、南東部分が測量区外に伸びていることや、北西部分がSDA101に切られるため、全容は不明である。周溝の北東隅に位置する部分がほぼ直角に曲がることや、北東側の周溝と南西側の周溝が平行かつ直線的に伸びることなどから、北北西～南南東(N-26°-W)に主軸をもつ方形周溝墓の可能性が高い。検出した平面規模(周溝を含む)は、長軸8.0m以上、短軸8.0m前後である。

本周溝墓は、T.P.+10.0m付近に堆積する第4A層土壌化層が構築基盤層と推測されるが、上位の第3A層が水田耕作土であることから、本来の構築基盤面は削平を受けている。したがって、墳丘盛土は、大部分が搅拌による喪失を余儀なくされており、わずか0.1m程を残すのみである。

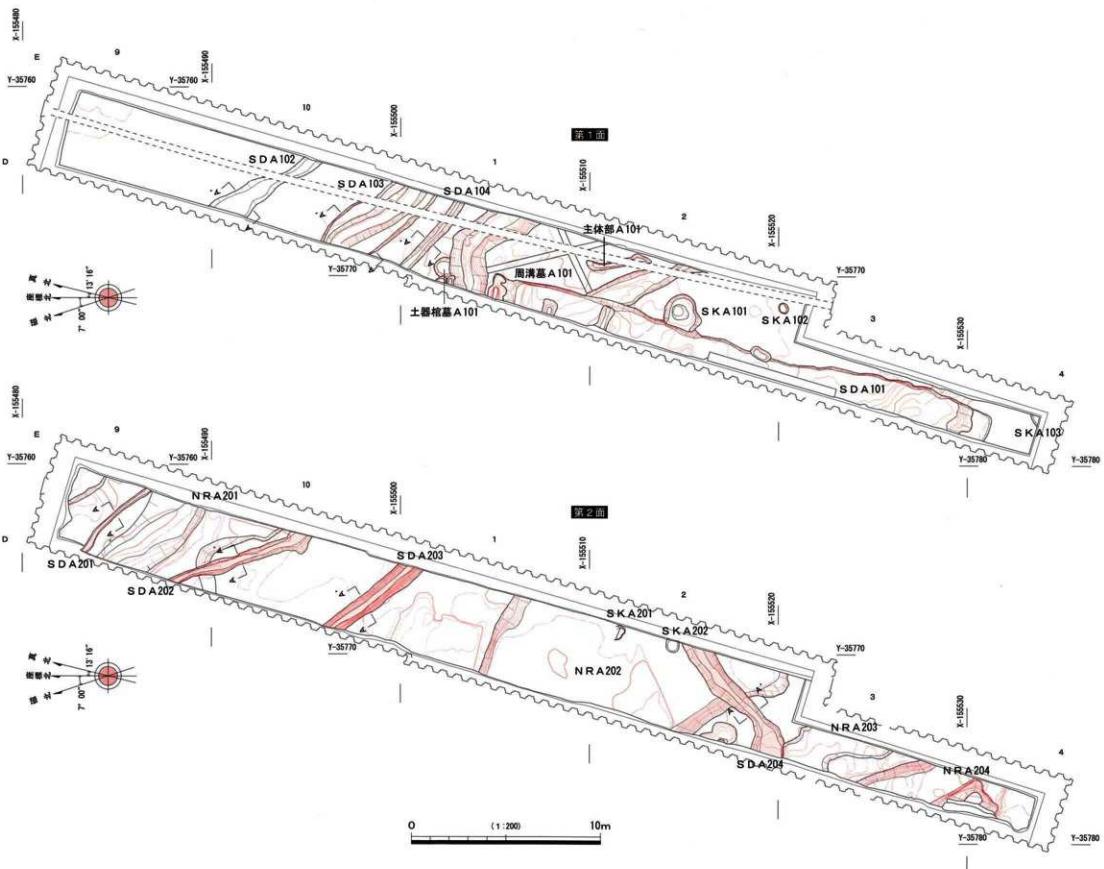
墳丘盛土は、暗灰色(2.5Y5/2)を帯びた極粗粒砂～5mm大礫混粘土質シルト～シルトから成る。盛土はブロック上で、細片遺物の混入も目立つ。

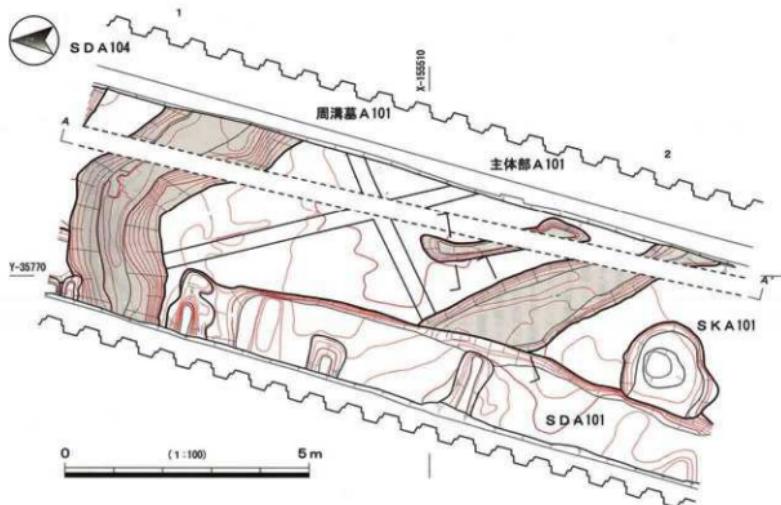
墳丘盛土の築成方法は、墳丘の残存が不良であったことから明らかにできなかった。

墳丘盛土の構築土は、特別に選定した土ではなく、周溝の掘削土を用いているものと推測される。したがって各周溝が掘削された地点の母材の違いから、墳丘北部では粘土質シルト～シルト優勢の、墳丘南部では細礫混シルト優勢の土が供給されている。

墳丘盛土下面については、墳丘盛土が開始される直前に、墳丘の割り付けや整地、あるいは祭祀等を行った痕跡の有無に注目したが、決定打を得ることはできなかった。ただし、基盤層上面のレベルに注視すると、墳丘盛土の位置する部分と、周溝の外側に位置する部分の検出レベルでは、後者の方が高いことが判明。したがって、墳丘盛土が成される部分については、基盤層を削り、平坦面を形成するなどの整地が行われた可能性が考えられる。

周溝は、検出部分で上幅約1.5m・深さ0.5mの規模を有する。検出した墳丘盛土上面と周溝最深部との比高差は0.6m程度である。





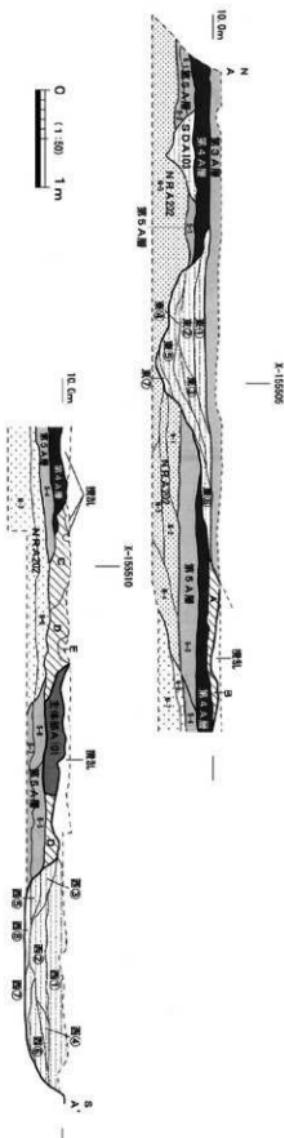
第5図 周溝基A101平面図

周溝の断面形状は不整形な椀形を成し、概ね内側(墳丘盛土側)の傾斜が外側に比して急である。周溝内埋土は複数に分層できるが、いずれもブロック土や遺物が混在するもので、概ね墳丘盛土や基盤層からの流出土で充填されている。周溝が一定期間開放状態であったことを示す粘性の自然堆積層は認められない。

周溝内からは遺物が出土した。遺物は、北東周溝や周溝北東隅、北周溝で多数出土し、南西周溝からは、ほとんど認められない。遺物は、周溝内に意図的に置いた、あるいは投棄したものではなく、流出土内に混入していたものである。遺物は、弥生時代中期～古墳時代前期のものが確認できた。この内弥生時代中期の遺物(A37・A38:土器棺墓A101で概説を行う)は、本周溝墓が弥生時代中期の遺構面を破壊したことによって混入したもので、本周溝墓に直接関連するものではない。したがって、本周溝墓の帰属年代は、古墳時代前期の遺物から導き出されるべきである。

主体部については、墳丘検出部分の南西部で、ほぼ南北(N-4°-W)に主軸を持つ不整形長方形土坑(主体部A101)がその候補として挙げられる。平面規模は、長軸3.40m以上、短軸約0.55m、深さは約0.22mである。断面形状は掘形の傾斜が急で、底面に平坦面を形成する逆台形である。埋土は黒褐色(10YR3/1)を帶びた1~5mm大細礫混粘土質シルトで、にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルトのブロック(5~10cm大)や土器細片が混在している。平、断面形状からは、何らかの規格を持った土坑と考えてよい。しかし、人骨や主体部構造など直接的に墓と認知できる属性が欠落していることから、周溝墓と関連のあるものかを含めて検討をする。

次に、本周溝墓から出土した遺物の概説を行う。A1~A7は、盛土内に混在していた遺物である。A1・A2は壺。この内A1は二重口縁壺の口縁部細片である。外反しながら大きく開く



第3A層：炭酸カルシウムの微細な粒子からなる、表面が滑らかで、手触りが柔らかい。

6-1 深色 (10YR 4/2 墓塀用色) - 2m²
6-2 深茶色 (10YR 4/3 墓塀用色) - 2m²
6-3 黒色 (10YR 4/1 墓塀用色) - 2m²
(レ) 淡灰色 (10YR 5/1 墓塀用色) - 2m²
6-4 淡青色 (10YR 4/2 墓塀用色) - 2m²
6-5 淡緑色 (10YR 4/3 墓塀用色) - 2m²
(ブルー) 淡青色 (10YR 4/2 墓塀用色) - 1箇シート - ブロック (2~3m²) 価格

NRA202: N-1: 淡色(7.5%1) 基土質シート

レバーベルト(0677)シルト→灰色(0676)馬士賀シルトラミナリーライムストーン

ドエクセル(304×1)シルト→200×1細織ラミン
N-4灰色(1076×1)繊維強化→1mm大頭織造板・質シルト→シルト

N-5: オリーブ灰色(2.506/1)シルト～細粒砂

N-6:灰黃褐色0.07m(1/2)~5mm大瘤狀疣粒主質
N-7:灰色(51%)/1)粗粒5~2mm大瘤狀

THE JOURNAL OF CLIMATE

第4A層：新石器時代後期～古墳時代前期の土塁(?)層

第六八回：元和時代中期の土蔵化層

第6圖 周清墓A101斷面圖

一次口縁とそこから上方に外反しながら立ち上がる二次口縁から成る。A2は直口壺と推測される。頸部外面には断面三角形の突帯を貼り付ける。両者ともにナデ調整。搬入品の可能性が高い。

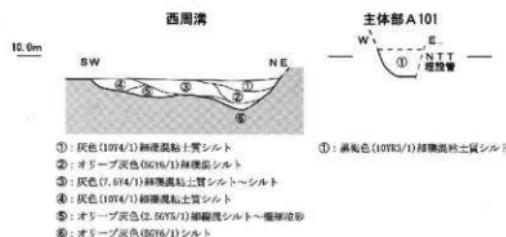
A3～A5は甕の口縁部～頸部細片。いずれも口縁端部は内厚し、丸く仕上げる個体(A3)、内傾する平坦面を形成する個体(A4・A5)を確認した。頸部内面は、ケズリ調整が頸部直下まで及ぶことに起因する鋭利な屈曲点を形成する個体(A3)と、ケズリ調整後、横ナデを加えほぼ垂直な平坦面を作る個体(A5)が存在する。

A6は小型の鉢。外面はナデ、内面は横位に板ナデを施す。粗雑な作りの個体で、外面には縦に走る多数の亀裂が特徴的に認められる。口縁部には、焼成後に形成された打ち欠きが2ヶ所(対角線上に存在)見える。

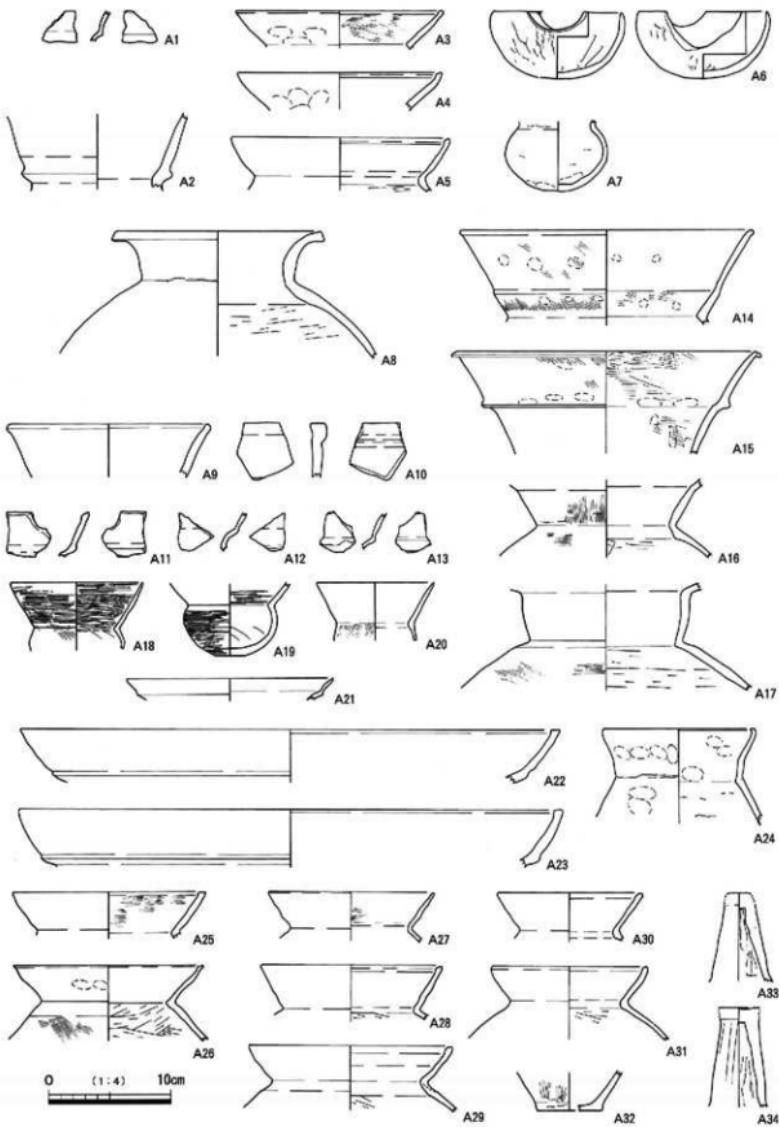
A7は体部が扁球形を呈する小型丸底壺である。調整は摩滅のため不明瞭である。

A8～A34は周溝内出土遺物である。A8～A17は壺である。A8は広口壺。口縁部は大きく外反し、端部には外傾する平坦面を形成する個体である。調整は体部内面をケズリ調整する以外はナデを行う。A9は直口壺と推測される。A10はほぼ垂直に立ち上がる口縁部を有する個体である。端部には水平な平坦面が見える。A11～A17は二重口縁壺である。この内A11～A13は器厚が薄いことから、小型の器種であったことが推測される。一方A14～A17は、概ね口径が20cmを超える個体と考えられ、一次口縁と二次口縁の外傾角度がほぼ同じ個体(A14・A15)と、一次口縁に比して、大きく傾斜する二次口縁を有する個体(A16・A17)に分類できる。A18～A20は小型丸底土器である。いずれも、口径が体部最大径を凌駕する個体である。調整は、概ねハケナデ後、横位にミガキを密に施す。精製品である。A21は小型有段鉢。摩滅のため不明瞭であるが、横位にミガキを密に施す。A22・A23は、内湾気味に短く開く口縁部と、水平な平坦面を有する端面を形成する大型の鉢と推測される。口縁部最下位には変化点が見える。山陰地域からの搬入品の可能性が考えられる。A24は製塙土器か? 内湾気味に長く立ち上がる口縁部を有する個体で、肩部の張りは小さい。指頭成形後ナデ調整を行うが、概して粗略であり、そのため粘土接合痕が数箇所で確認できる。A25～A31は甕。頸～肩部内面に施すケズリ調整を起因とした、頸部内面の屈曲が鋭利な個体(A25・A26)と、そうでない個体(A27～A31)に区分できた。後者については、口縁端部の形態により、丸く終息する個体(A27)、内厚し、内傾のにぶい端面を形成する個体(A28・A29)、内厚し、丸く終わる個体(A30・A31)に分類できた。調整は、概ね肩部内面をケズリ調整する以外は、ハケナデで仕上げている。A32は壺の底部。平底を呈し、外面には縦位ミガキが見える。A33・A34は高杯の柱状部。A34は外面に縦位板ナデを施す。胎土は精良。

以上の土器は、概ね米田編年の布留IIの特徴に近いことから、帰属年代を古墳時代前期(布留式期古～中相)に求めることが可能である。



第7図 周溝基A101 西周溝・主体部A101断面図(S=1/40)



第8図 周溝墓A101出土遺物

土器棺墓A101

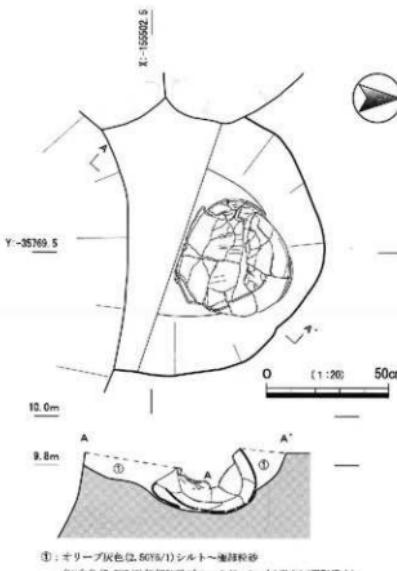
III-1 D区で検出した土器棺墓である。本上器棺墓は、第5 A層土壌化層を構築基盤層としたと推測されるが、上位の第4 A層も土壌化層であることから、本来の構築基盤面は不明瞭である。

掘形の平面形状は、ほぼ円形をもつものと推測されるが、南部分が周溝墓A101の北周溝に切られるため、全容は不明である。平面規模は、長軸0.5m以上、短軸約1.04m。断面形状は浅いレンズ状を成し、深さは0.57m以上を有する。掘形埋土は、オリーブ灰色(2.5GY6/1)を呈したシルト～極細粒砂で、灰白色(7.5Y7/2)極細粒砂のブロック(2～3cm大)が混在している。

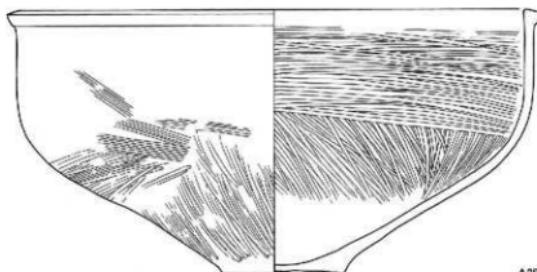
掘形の中央付近からは、ほぼ完形の上器棺が出土した。土器棺は棺身(A36)と棺蓋(A35)から成る。棺身に使用した甕(A36)は、ほぼ真南で、若干仰ぎ気味に口縁部を向けて埋設されていた。鉢を転用した棺蓋(A35)は、棺身の口縁部と合せ口になるように被せている。棺内から人骨をはじめ、その他遺物の出土は皆無であった。

A35は鉢。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部には外傾の平坦面を有する、底部は突出せず、若干上げ底を成す。調整は主にミガキを施すが、口縁部外面には最終的に左斜位ハケナデが加えられる。口径：41.4cm、体部最大径：42.2cm、底径：10.1cm、器高：21.7cmを測る。A36は甕。口縁部が上方に短く開いた後、外傾の平坦面を形成する個体である。体部最大径は中位より若干上に位置し、若干突出した底部はにぶい上げ底を形成する。調整は体部下位が縦位ミガキ、中位が横位～左斜位ミガキ、肩部状は横ナデを施す。法量は、口径：33.8cm、体部最大径：39.7cm、底径：9.3cm、器高：44.1cmを測る。A35・A36は、いずれも灰黄褐色～黒褐色を呈し、胎土に角閃石を含む生駒西麓産の個体である。帰属年代は概ね弥生時代中期末頃に比定される。

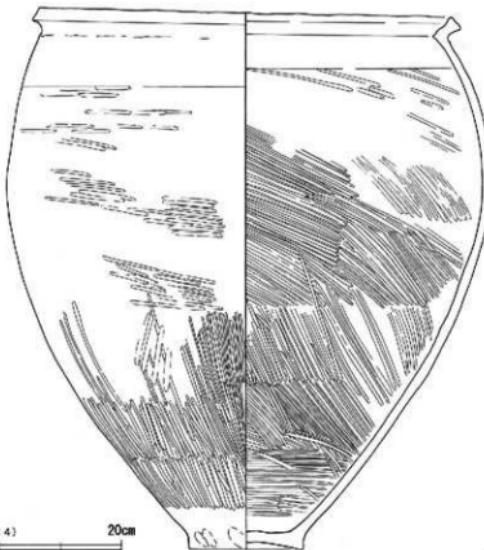
ここで、周溝墓A101の周溝内より出土した弥生土器A37・A38の概説を行う。先にも触れたが、両遺物は、周溝墓A101の周溝を開削する際に、破壊され、周溝底に混入したものと推測される。両遺物は、ほぼ完形の鉢(A37)と甕(A38)の2個体に復元できた。この内A37は、直立する口縁部と、端部に水平な平坦面を持つ個体である。口縁部と体部の境界には明瞭な変化点を形成し、1条の沈線文も加えられる。調整は、体部外面がケズリ後縦位ミガキ、内面が横位ミガキを、口縁部がナデを行う。法量は口径：42.7cm、体部最大径：42.2cm、器高は21.5cmを超える。一方A38は、緩やかに短く外反する口縁部と小さく直立する端面を有する個体である。体部最大径は中位



第9図 土器棺墓A101平・断面図



A35



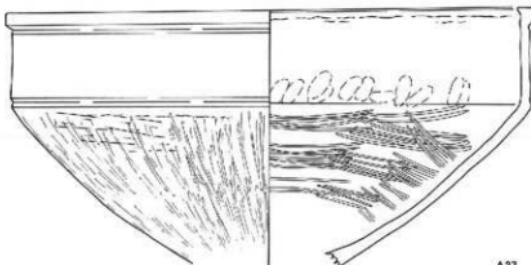
A36

0 (1:4) 20cm

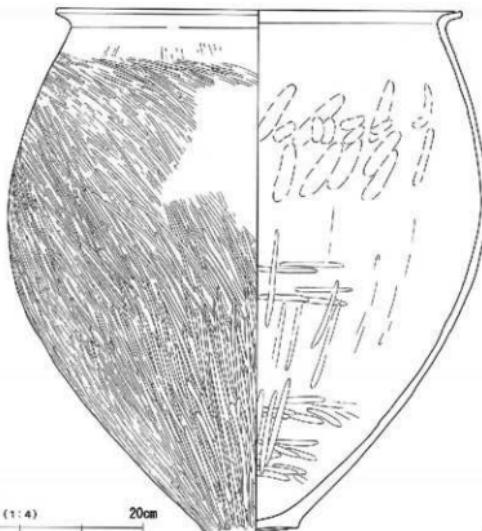
第10図 土器棺墓A101出土遺物

より若干上に位置し、底部には小さな上げ底を持つ。調整を見ると、概ね縦～左斜位ミガキ後、口縁部～肩部付近のみ横ナデを加える。法量は口径：32.8cm、体部最大径：39.0cm、底径：7.3cm、器高：43.3cmである。色調や胎土は、両個体とともにA35・A36と同様である。帰属時期は弥生時代中期後半～末に比定され、A35・A36よりも若干古い様相が認められる。

A37・A38については、器形や胎土、法量がA35・A36と類似する点に注目したい。これは、A37・A38が、土器棺墓A101を成すA35・A36と同様、土器棺身・蓋を構成した遺物であったことを予見させる成果である。つまり、土器棺墓A101周辺において、この土器棺墓以外に少なくとももう一基、A37・A38で構成された土器棺墓の存在した可能性が高くなつた。



A37

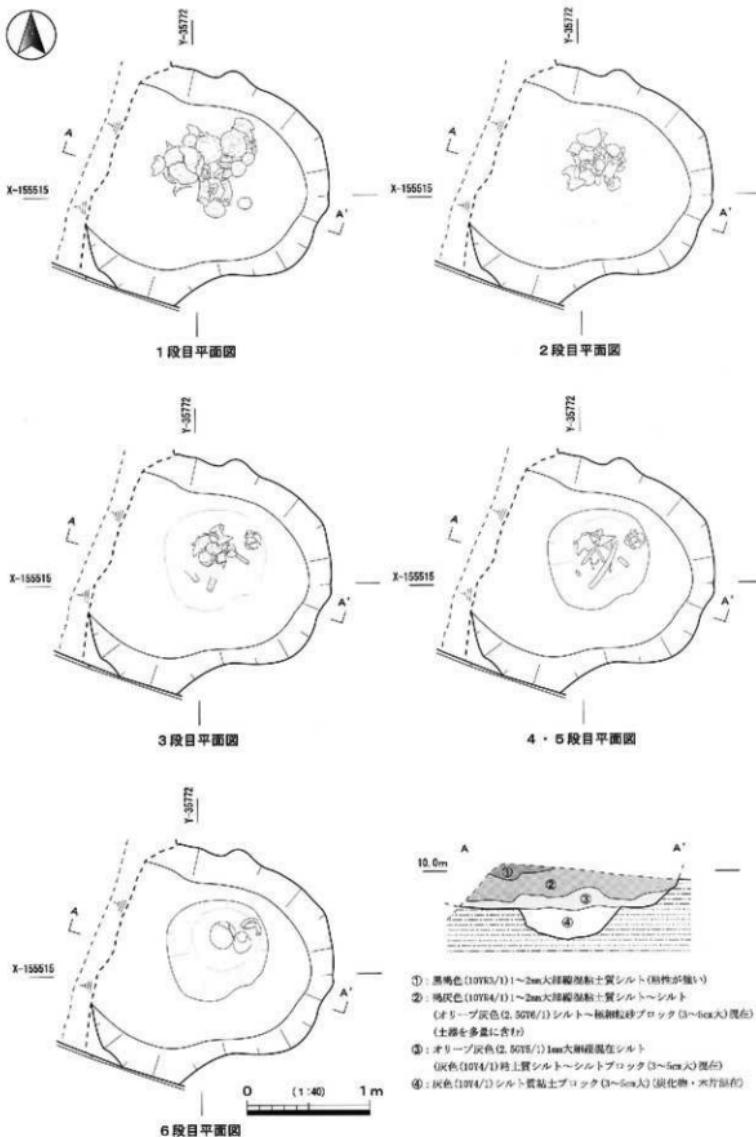


A38

第11図 周溝墓A101周溝内出土遺物

SKA 101

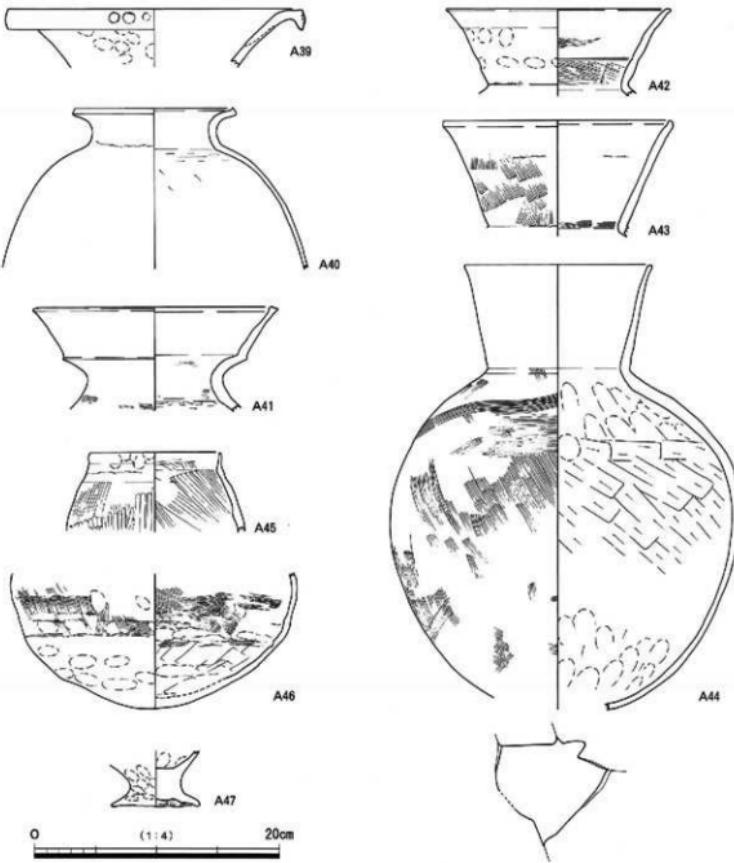
III-2C区検出の土坑である。周溝墓A101の南西付近に位置する。本遺構は、西部分が一部SKA 101に切られるため全容は不明であるが、掘形平面形状はほぼ形円形(径約2.0m)であったと推測される。断面形状は浅いレンズ形を成し、深さは約0.3mを測る。この基底面のほぼ中央には、平面円形(径約0.8m)、断面扁球形(深さ約0.3m)の段落ちが掘削される。したがって、断面形状は二段を成し、検出面からの深さは約0.6mを測る。埋土は、上位から①層：黒褐色(10YR3/1)1～2mm大細礫混粘土質シルト(粘性が強い)、②層：褐灰色(10YR4/1)1～2mm大細礫混粘土質シルト～シルト(オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト～極細粒砂ブロック(3～5cm大)混在) (土器を多量



第12図 SKA 101平・断面図 ($S = 1/40$)

に含む)、③層: オリーブ灰色(2.5GY5/1)1 mm 大細縫混在シルト(灰色(10Y4/1)粘土質シルト～シルトブロック(3～5 cm 大)混在)、④層: 灰色(10Y4/1)シルト質粘土(炭化物、木片混在、3～5 cm 大ブロック)で充填される。各埋土間に時間的断絶を示す間層は認められない。

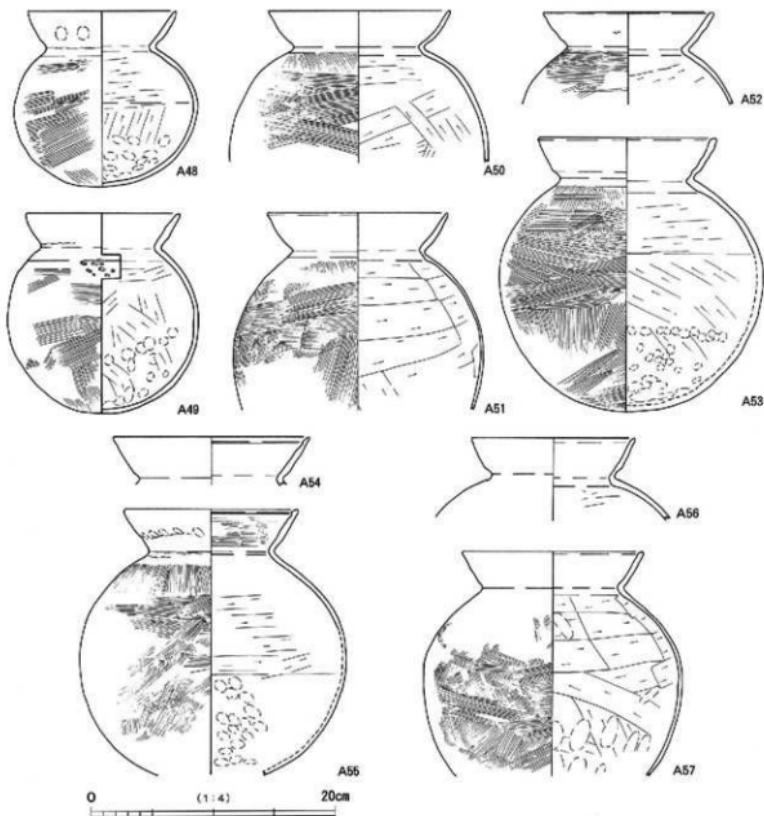
土坑内からは、多量の土器(A39～A85)が出土した。この土器群は投棄されたものではなく、意図的に 6 段に積み重なるように埋置された可能性が高い。まず最下層には、口縁部を下に向いた壺、甕、鉢が各一個体置かれ、その後、その上に木材(加工は施されていない)を井桁状に組み、さらにその上に 5 段分土器群を積み上げる。各段における土器群の埋置方法にも規格が存在する



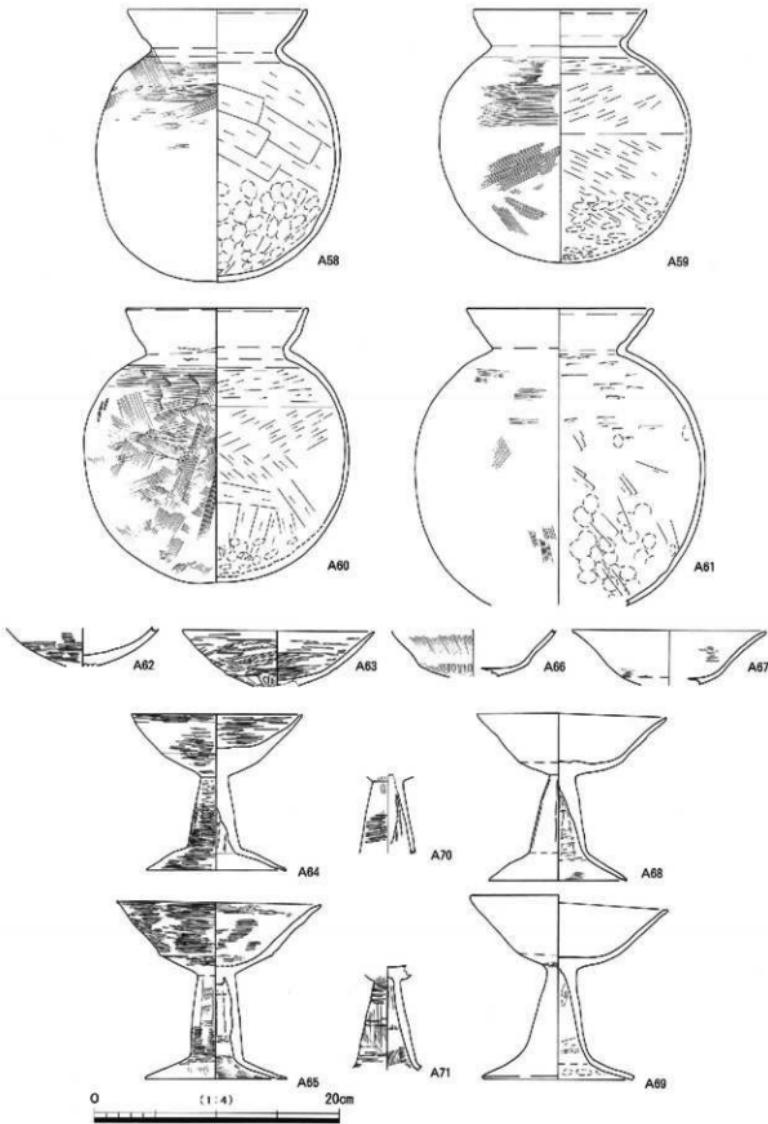
第13図 SKA 101出土遺物 1

ようで、例えば、2段目の土器群を見ると、壺や甌は横臥状態で、しかも口縁部を外側に向いているものが多いことが確認された。3段目の土器群は、外側に高杯を置き、土器群の外郭ラインを形成していることが窺えたほか、口縁部を上方に向けて埋置した小型の甌の口縁部を、さらに小型の甌で蓋をしていたり、高杯の杯部に小型丸底土器を置くなどの特徴が見られる。また、土器群の中には、焼成後に穿孔された個体も存在する。以下、出土遺物の概説を行う。

A39～A45は壺である。A39・A40は広口壺。生駒西麓産の胎土を有するA39は、口縁端部は下方に垂下し、直立する平坦面を形成する。この平坦面上には円形浮文(3個確認)を貼り付けている。A40は東部瀬戸内地域からの搬入品の可能性が高い、橙色を呈した個体である。焼き歪みが見える。A41二重口縁壺。外反する一次口縁と、直線的に上外方に開く二次口縁から成る個体



第14図 SKA 101出土遺物 2

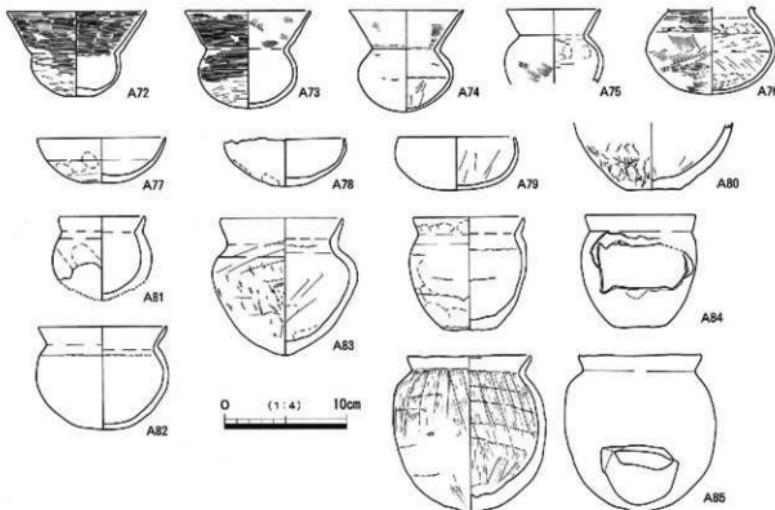


第15図 SKA 101出土遺物 3

である。肩部外面には縦位ハケナデ、内面には横位ケズリ施される。搬入品の可能性が考えられる。A42～A44は直口壺。この内A44は、球形を呈する体部最下位において、焼成後に穿たれた孔が1個見える。A45は無頸壺。体部には、ケズリ調の板ナデを施した後、外面において縦位ミガキを行う。口縁部はナデ。A46は壺、または鉢の体部～底部である。底部は丸底である。調整は指頭成形後左斜位～横位ハケナデを行う。A47は脚台部。指頭成形後ナデ調整で仕上げる。

A48～A61は甕である。A48～A53は直線的～内湾気味に開く口縁部と、丸く終息する端部を形成する個体である。体部は概ね球形を呈する。調整は体部外面がハケナデ後口縁部～肩部にかけて横ナデで仕上げる。内面は、底部～体部下位において指頭成形が見える以外はケズリ調整が主体となる。最後に口縁部～頸部にかけて横ナデを加えるが、これが起因となって、頸部内面の屈曲に鈍さが生じる。A49の肩部外面には、串状の工具による押圧痕を確認した。また、A53の肩部外面には、左下→右上→左下へと折り返す装飾のようなハケナデも見える。法量を見ると、口径：12cm前後、器高：14～16cmの個体(A48・A49)と、口径：13～14cm、器高：20cm前後の個体(A50～A53)に二分できる。一方A54～A61は直線的～内湾気味に開く口縁部と、端部を内厚させる個体である。体部の形状は球形に近い。調整は、A55の口縁部内面に横位ハケナデが行われる以外は、A48～A53と同様である。A58・A60の肩部外面に串状工具による押圧痕が見えるほか、A55の肩部外面にはA53同様の文様調のハケナデが施される。

A62～A71は高杯である。A62～A65は有稜高杯。直線的に開く口縁部を有し、杯部との境界を成す稜の退化が著しい個体である。調整は横位のミガキを密に施す。概して精製品である。一



第16図 SK A101出土遺物 4

方A66～A69も有稜高杯。前者に比して口縁部は外反気味に開き、稜はほとんどその姿を留めていない点が特徴的である。調整は摩滅のため不明瞭であるが、ハケナデが主体を成す。A70・A71は柱状部。主に横位ミガキ調整が観察できることから、A62～A65に近い型式が予測できる。

A72～A76は小型丸底土器である。口径が体部最大径を超える個体(A72～A74)と、口径と体部最大径がほぼ等しい個体(A75)に分類できる。前者は横位のミガキを密に施す。後者は摩滅のため不明瞭であるが、ハケナデが主体を成す。A76は扁球形の体部。体部最大径を中位に持つ。調整はハケナデが見える。

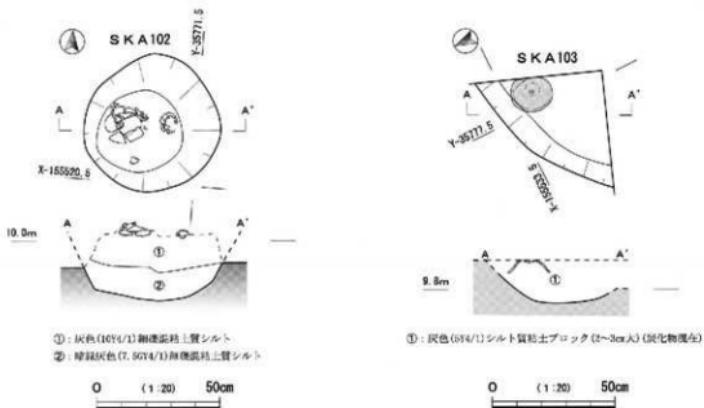
A77～A80は粗略な作りの小型鉢である。底面に平坦面を形成する個体(A77・A78・A80)と丸底の個体(A79)に区分される。調整は主にナデが行われるが、A79の内面のみ横位に板ナデを施す。A80の外面には縦位に無数の亀裂が入っている。

A81～A85は、器厚に富み、その結果、大きさに反して重量を感じる点が特筆される小型壺である。いずれも口縁部は短く開き、端部は丸く終息する。体部形状は、扁球形の個体(A81・A82)、肩が張り、底部が尖り底を呈する個体(A83)、長胴形を成す個体(A84・A85)に分類できる。調整はナデが中心で、概して粗略である。この内A85は、体部内・外面ともに縦位にケズリ調の板ナデを行う。また、A83の体部外面には縦位に無数の亀裂が観察できるほか、A84・A85の体部には、焼成後に行われた穿孔が確認できた。

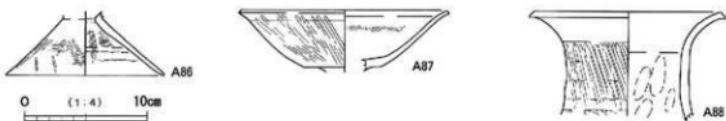
この土器群は、概ね米田編年の布留Ⅱの特徴を有することから、古墳時代前期(布留式期古～中期)に帰属するもので、当該期の一括資料に成り得る。また周溝墓A101と時期的にほぼ並行関係にあることから、本土坑の性格を推測する上で注目される。

SKA102

III-3 C区検出の西南西-東北東方向に主軸をもつ梢円形を呈した土坑である。規模は、長軸



第17図 SKA102・103平・断面図



第18図 SK A102・103・SD A103出土遺物

が0.57m、短軸が0.45mを測る。深さは0.29mで、断面形状は浅いレンズ形である。埋土は2層のブロック土から成る。本土坑からは古式土師器小壺部細片(A86)が出土した。頸部は貫通し、裾部は下外方に直線的に開く個体である。外面には横位後縦位ミガキが、内面は縦位ハケナデが施される。帰属時期は古墳時代前期と推測される。

S KA103

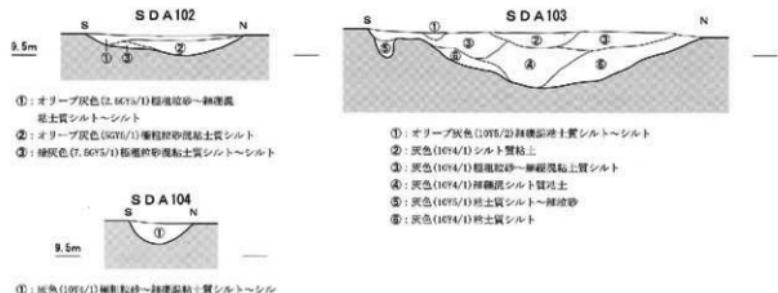
調査区南端(III-4C区)で検出した土坑である。本土坑は南部と東部分が調査外に伸びたため、全容は不明。検出規模は長軸が0.84m以上、短軸が0.5m以上である。深さは0.2mを測り断面形状は浅いレンズ形を呈する。埋土はブロック土の単層を充填する。本土坑からは古式土師器有稜高杯細片(A87)が出土した。口縁部は外反気味に開き、稜の退化が著しい個体である。調整は外面が縦位ミガキ、内面が縦位ハケナデである。帰属時期は古墳時代前期と推測される。

SD A101

III-1C・2C・3C・4C区検出の南南西-北北東に伸びる溝である。検出長は27m前後であるが、本調査区の北、南それぞれの地層断面でも観察されていることから、本来は、本調査区(あるいは本調査区に隣接して南北に伸びる府道八尾道明寺線、または陸上自衛隊八尾駐屯地敷地東端ライン)にはほぼ平行して伸びる長さ56m以上を測る溝であったと考えられる。断面形状は不定形を呈し、深さは0.4mを測る。埋土はブロック土の単層から成る。出土遺物は近代~現代の一升瓶や清涼飲料水の缶などを確認した。したがって、本遺構の時期は極めて現代に近い。

SD A102~104

調査区北部(III-10D・III-1D区)において、南東-北西方向にほぼ平行して伸びる溝を3条(北からSD A102~104)検出した。3条ともに調査区外に伸びる溝で、検出長は5.0mである。幅は



第19図 SD A102~104断面図(S=1/40)

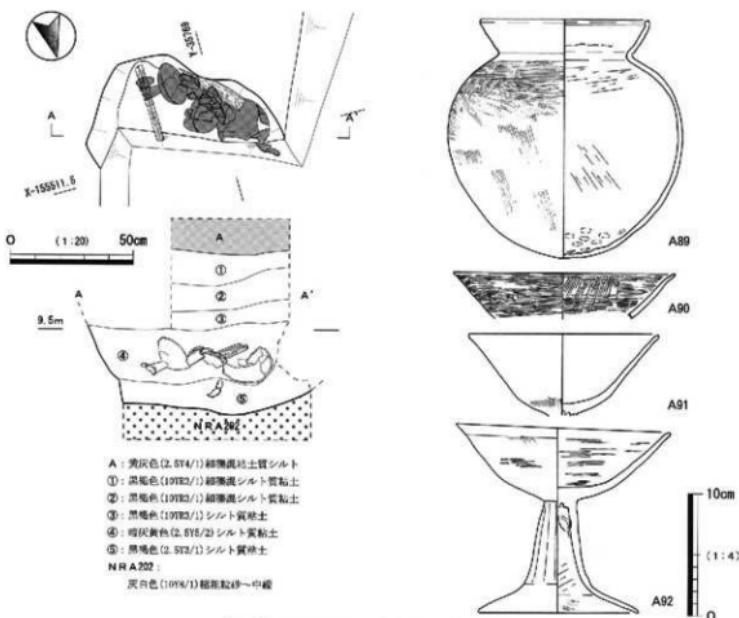
SDA102が1.3m、SDA103が2.8m、SDA104が0.6mを測る。深さは、SDA103が0.45mであるが、その他は0.15~0.17mと浅い。断面形状はいずれも浅いレンズ形を呈する。埋土はSDA102が3層、SDA103が6層、SDA104が単層であった。SDA103からは古式土師器細片(A88)が出土した。A88は広口長頸壺である。口頸部は直立した後、外反する口縁部が形成される。端部には外傾の平坦面が作られる。調整は外面が継縫ミガキ後、口縁部のみ横ナデを加える。内面はナデ。東部瀬戸内地域からの搬入品の可能性が考えられる。帰属時期は古墳時代前期である。

第2面(弥生時代中期)

弥生時代中期に形成されたことが推測される第6A・第7A層土壤化層を除去後、第8A層上面(T.P.+9.2~9.6m)を精査し、検出した造構面である。第1面同様、南高北低の地形を有し、標高差は0.4mを測る。ここでは、土坑2基(SKA201・202)、溝4条(SDA201~204)、流路4条(NRA201~204)を検出した。上記の造構の内、SKA201については、既設のNTT管直下で検出したもので、本来は第4A層を構築基盤層とする造構であった可能性が高い。

SKA201

III-2D区検出の土坑である。本土坑の北側は搅乱により不明瞭であるが、概ね東南東-西北



第20図 SKA201平・断面図・出土遺物

西に主軸をもつ楕円形～隅丸方形を呈した可能性が考えられる。検出規模は長軸0.75m、短軸0.45m程度を有し、深さは0.65mを測る。断面形状は浅い逆台形を呈する。埋土は5層のブロック土で構成される。本遺構からは古式土師器(A89～A92)が出土した。A89は甌。口縁部は内湾し、端部は内厚し丸く終息する個体で、体部は球形を呈する。調整は、外面がハケナデ後口縁部～頸部付近のみ横ナデを、内面は、頸部直下～体部をケズリ調整後、口縁部～頸部に横ナデを加える。底部内面には指頭成形痕が見える。いわゆる布留式甌である。A90～A92は後の退化が著しい有稜高杯。調整は概ね横位ミガキが行われる。帰属時期は古墳時代前期である。

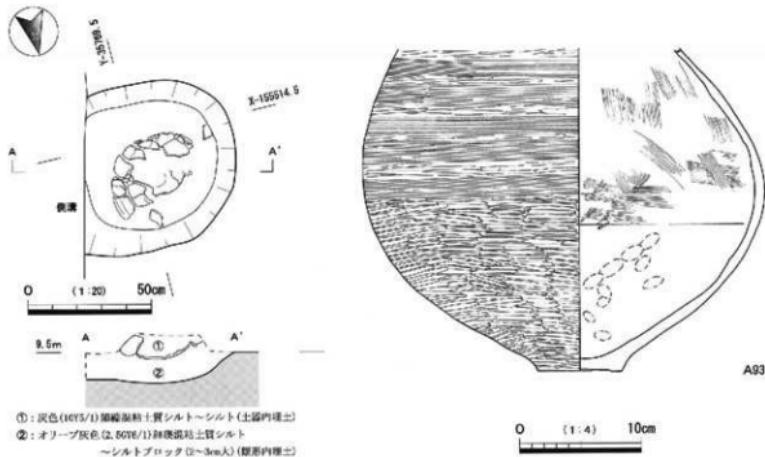
S KA202

S KA201の南に近接する地点(III-2 D区)で検出したほぼ円形の土坑である。規模は、径0.7m、深さ0.18mを測る。断面形状は浅いレンズ形。埋土はブロック土の単層である。本遺構の中央には弥生土器(A93)が埋置されていた。A93は体部上位が打ち欠きにより欠損した可能性の高い壺である。体部形状は、最大径を中位に持つほぼ球形である。底部は若干突出し、上げ底を形成する。調整は、横位のミガキを密に行った後、体部上半に5帯以上の櫛描直線文(10本/単位)で加飾を行う。内面は指頭成形後、上半にはハケナデを施す。法量は体部最大径：32.6cm、底径：7.0cm、器高：26.5cm以上を超える。胎土は生駒西麓産である。

A93の出土状況や、法量などから勘案すると、本遺構は土器棺墓であった可能性が考えられる。帰属時期は弥生時代中期前半(畿内第II様式)を想定したい。

S DA201

本調査区の北部(II-9 D)検出の南東～北西方向に伸びる溝である。検出長は5.0m、幅は0.3mを測る。深さは0.04mで、断面形状は非常に浅いレンズ形を呈する。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。



第21図 S KA202平・断面図・出土遺物

S D A 202

II - 9 D • 10D 区で検出した南南東-北北西に伸びる溝である。検出長は5.0m、幅は0.52mを測る。深さは0.17mで、断面形状は浅いレンズ形を呈する。埋土は2層のブロック土から成る。出土遺物はなし。

S D A 203

II - 10D • III - 1D 区検出の南東-北西方向に直線的に伸びる溝である。検出長は5.2m、幅は1.0mを測る。深さは0.57mで、断面形状は半球形を呈する。埋土は4層のブロック土から成る。出土遺物はなし。

S D A 204

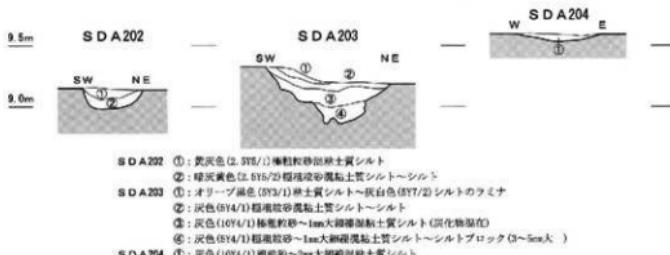
III - 2 C • D • 3 C 区で検出した溝である。南西-北東方向に不整なS字状にくねりながら伸びる溝である。検出長は5.5m、幅は0.7mを測る。深さは0.06mと非常に浅く、断面形状は浅いレンズ形を呈する。埋土は単層である。出土遺物はなし。

N R A 201

調査区の北端(II - 9 D • 10D)で検出した流路である。概ね南南東-北北西に向かって流れていた河道である。検出長は6.5m、幅は7.0mを測る。深さは0.6mで、ラミナ構造の顕著な砂礫層で充填されていた。

N R A 202

本調査区の中央やや南(III - 1 C • D • 2 C • D • 3 C 区)検出の流路である。N R A 201同様概ね南南東-北北西に向かって流れていた河道である。検出長は6.5m、幅は11.0mを測る。深さは0.64mで、ラミナ構造の顕著な砂礫層で充填されていた。砂礫内には、摩滅の進行した弥生中期の遺物(A94~A102)が混在していた。A94~A99は壺である。A94~A96は26~30cmの口径を有する広口壺。A94の口頸部には、断面三角形の把手状の突起を貼り付けている。A95は、口縁端部を下方に拡張し、平坦面を形成する。この端面には、櫛描列点文(6点以上/単位)を交差させた格子様の文様を施すほか、端面下端にはキザミ目を加えている。A96の口頸部外面には、ナデ後直線文(6条確認)を施す。A97は、短く外反する口縁部と体部中位に最大径を有する個体である。外面には縦位ミガキ調整が見える。A98は口径が4.3cmを測る小型の壺と推測される。調整



第22図 S D A 202~204断面図(S = 1/40)

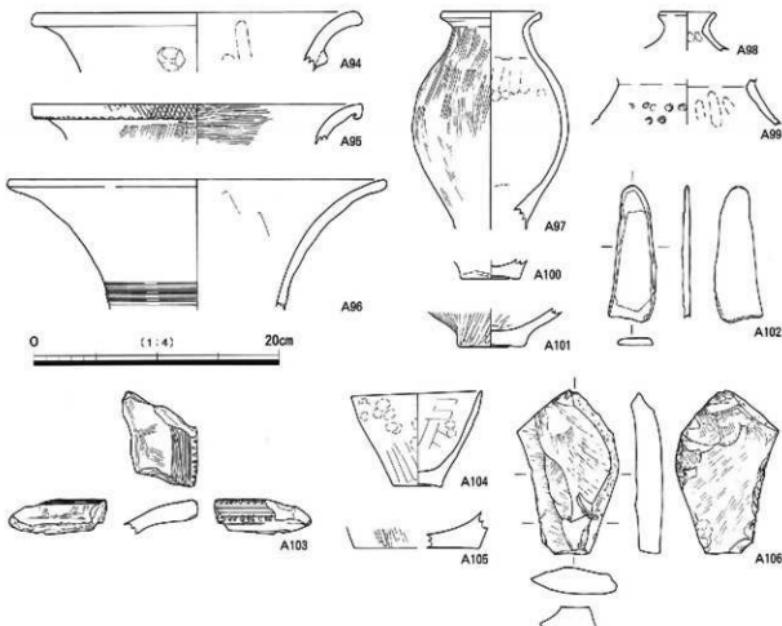
は、指頭成形後ナデを行うのみである。A99は壺の肩部付近の細片である。外面には竹管文を散らしている。A100・A101は底部。両者ともに突出し、小さな上げ底を持つ。A102は石製品である。外縁には片刃の鎌が見えることから、石包丁の可能性が高い。石材は不明。

N R A203

本調査区の南部(III-3C区)を南東-北西方向に伸びる流路である。検出長は2.5m、幅は2.38mを測る。深さは0.06mで、ラミナ構造の顕著な砂礫層で充填されていた。

N R A204

本調査区の南端(III-3C・4C区)を南南東-北北西に伸びる流路である。本流路は途中で二股に分流している。この場合、本調査区より南に本流が存在した可能性が高い。検出長は3.5m、幅は5.0mを測る。深さは0.7m以上で、ラミナ構造の顕著な砂礫層や拳大の粘土質シルトブロックで充填されていた。砂礫内には、摩滅の進行した弥生時代中期の遺物(A103~A106)が混在していた。A103は生駒西麓産の広口壺。口縁端部の上・下端にキザミ目を、端面には櫛描文(3本/cm)を施す。口縁部は横位ミガキ調整。畿内第II様式に比定される。A104は完形の鉢。底面は若干上げ底を呈する。調整はナデ。A105は壺の底部か。平底で、外面には縦位ミガキが見える。A106は長さ13.1cm、幅7.1cmを測るサヌカイトの石核である。



第23図 N R A202・204出土遺物

第3面(弥生時代前期)

湿地性堆積物である第10A層を除去後、第11A層土壤化層上面(T.P.+9.2m)を精査し、検出した造構面である。溝1条(SDA301)を検出した。

SDA301

本調査区の南部(III-3C区)で検出した南東-北西方向にほぼ直線的に伸びる溝である。検出長は3.4m、幅は1.6mを測る。深さは0.28mで、断面形状は浅い不定形を呈する。埋土は3層のブロック土で構成される。本造構からは弥生土器甕細片(A107)が1点出土した。A107は甕の頸部-肩部付近である。開きの小さい肩部外面には、直線文(5条/単位)が施される。弥生時代前期に帰属する個体である。

第4面(弥生時代前期以前)

最終掘削深度であるT.P.+8.0m前後を機械的に平面精査した結果、検出した造構面である。第15A層内検出造構面と呼称すべきであろう。本来は第8A層を構築基盤層とする流路が当深度まで及んでおり、両肩を検出することができた。

NRA401

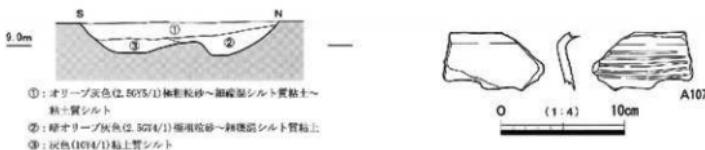
本調査区の中央やや南(III-1C・D・2C・D区)において、東南東-西北西に緩やかに円弧を描きながら伸びる河道路跡を検出した。検出規模は、長さ4.0m、幅は4.0mを測るが、本来は20m前後の幅を有し、深さは1.0mを超えることが、断面観察で確認できた。埋土はラミナ構造の顯著な砂礫層で充填されていた。

地層内出土遺物

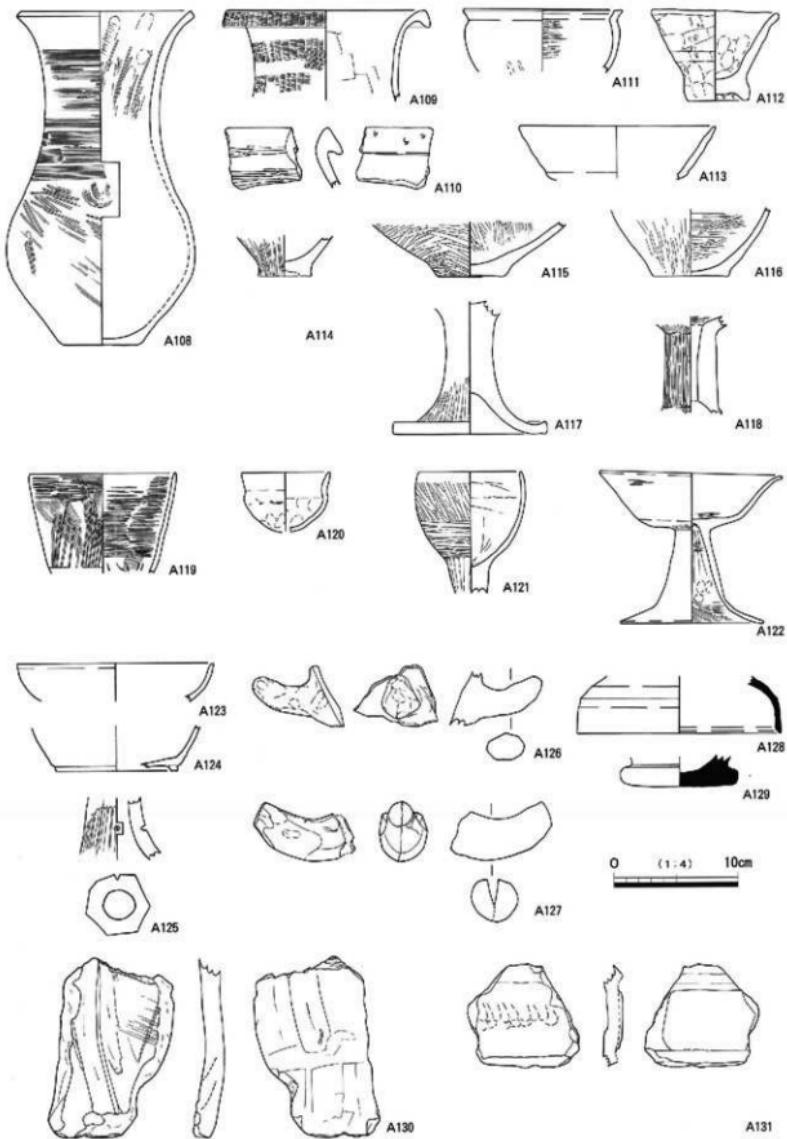
第1A~第4A層内出土遺物

A108~A110、A114~A118は弥生土器である。A108~A110は生駒西麓産の壺。A108は頸部外面に櫛描文(10本/cm)を8帯施す。肩部付近には流水文状の文様も見える。A109は垂下口縁を形成する個体である。下外方に拡張した端面には、ナデ後廉状文(12本/cm)を施す。口縁部はナデ後廉状文(15本/cm)を2帯以上刻む。A110は垂下口縁端面に刺突文を施す個体である。A114~A116は壺の底部。両者ともに外面にはミガキ調整を施す。この内A114の底面には木葉痕が見える。A117は弥生後期の高杯。柱状部から裾部へと緩やかに開く個体である。外面には縦位ミガキ調整を行う。A118は弥生後期に帰属する器台の可能性が考えられる。

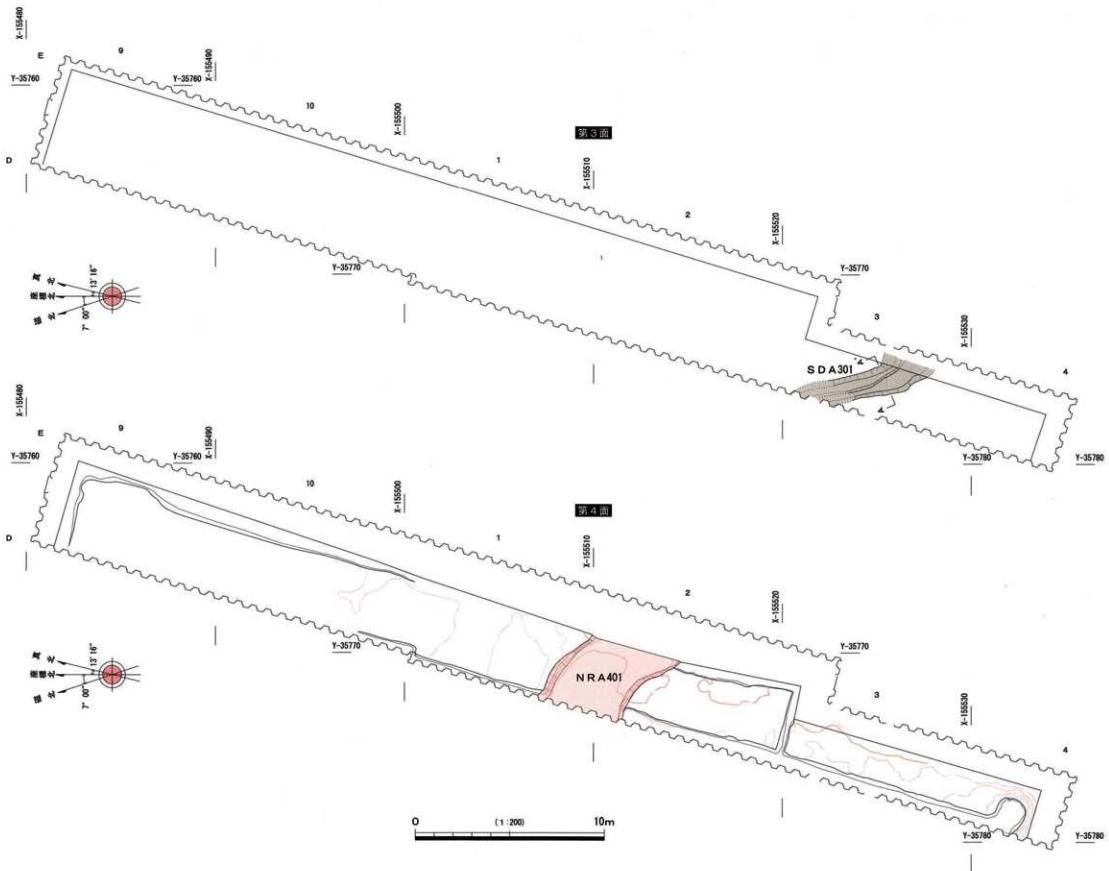
A111~A113、A119~A122は古式土師器である。A111は小型の壺。口径と体部最大径が等し



第24図 SDA301断面図(S=1/40)・出土遺物



第25図 第1A～第4A層内出土遺物 1



第26図 A区第3・4面平面図

い個体である。A112は鉢。指頭成形後ナデ調整のみの粗雑な作りである。A113は有稜高杯と推測される。口縁部は直線的に開き、稜の退化が著しい。A119は直口壺。密にミガキを施した精製品である。A120は指頭成形後ナデ調整の小型壺。底部は丸底を呈する。A121は深い杯部を有する椀形高杯。外面はミガキ調整を行う。庄内式期古段階に比定される。A122は有稜高杯。口縁部は外反し、稜は退化した個体である。

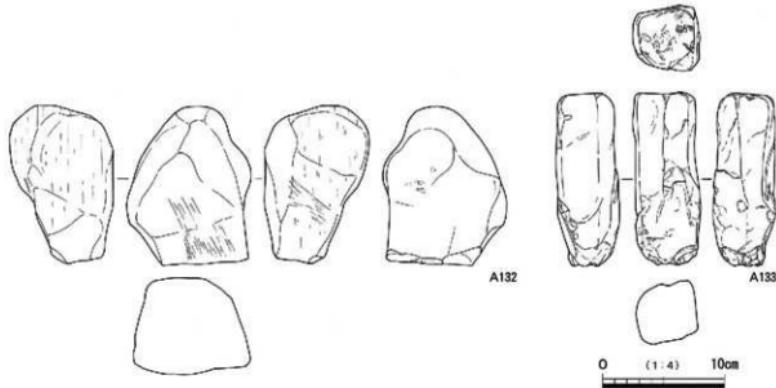
A123～A127は土師器である。A123は杯と推測される。A124は杯B。A125は高杯。外面調整は、縦位板ナデ(ケズリの可能性あり)による面取り(7角形)後縦位ミガキである。外面より穿孔を志向した小孔が1個見える。A126・A127は把手。この内A127は、先端をヘラ状工具で切り取り、平坦面を形成している。合わせによる作りである。韓式系土器の可能性が考えられる。

A128・A129は須恵器である。A128は杯蓋。稜は小さい。口縁端部には外傾の平坦面を形成。A129はこね鉢の底部である。

A130は円筒埴輪の底部である。外面には底部自重補正調整に伴う板状工具による押圧が行われる。内面は左斜位板ナデ(あるいはケズリ)後、縦位指ナデを行うが、この調整は、底部自重補正調整に伴う痕跡である。古墳時代後期(川西編年V期)に帰属する。

A131は土師器である。器種は不明。外面にはナデ後型押しによる文様が加えられる。この文様は、物語の一場面を表現しているかもしれない。

A132・A133は石製品である。A132は砥石。4～5面の平坦面が認められ、各平坦面には研磨痕が見える。石材は砂岩か。A133も4～5面の平坦面を持つもので、一端には敲打痕も見える。叩石の可能性も考えられる。石材は不明。



第27図 第1A～第4A層内出土遺物 2

第5章 B区の調査成果

第1節 基本層序

現地表(T.P. -12.362m)下1.2m前後までは、客土・盛土(第0B層)により充填されていた。以下現地表下3.7m前後までの2.5m間で11層におよぶ基本層序を抽出した。第1B層は近世～近代の水田耕作土。グライ化の顕著な擾拌層である。第2B層は調査区の中央～北部にのみ存在する河川堆積物である。第3B層は中世に比定される変形構造の顕著な水田耕作土である。第4B層は調査区の中央～北部にのみ存在する河川堆積物である。第5B層は古墳時代後期～中世の水田耕作土層である。本層の下面において第1面(古墳時代後期)を検出した。第6B層は粘土質シルト優勢の水田耕作土および上塗化層である。上面が第2面(弥生時代中期)に相当する。第7B層は弥生時代中期に比定される暗色を帯びた水田耕作土である。第8B層は粘土質シルト～極粗粒砂から構成される河川堆積物で、調査区全域に広がる。第9B層は弥生時代前期に相当する黒色を呈した水田耕作土。第10B層も弥生時代前期の水田耕作土である。本層上面が第3面に相当する。第11B層は縄文時代晚期～弥生時代前期の河川堆積物である。調査区全域で確認した。

第1B層：灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト～シルト

擾拌による2～3cm大のブロック土で構成された、近世～近代の水田耕作土である。
層厚は約0.4m以上。グライ化が顕著である。

第2B層：灰白色(5Y8/1)中粒砂～中礫

浅いトラフ型斜行ラミナ構造の発達した河川堆積物である。B区の中央～北部、南端に分布する。層厚は0.4～0.6mを測る。

第3B層：オリーブ灰色(10Y6/2)～灰色(10Y4/1)粘土質シルト～シルト

灰色(10Y6/1)シルトや灰白色(10Y7/2)～淡黄色(5Y8/3)細粒砂、黃灰色(2.5Y4/1)細礫のブロック土(2～3cm大)が混在する中世頃の水田耕作土である。木片や炭酸カルシウム塊(2cm大)も確認できた。層厚は0.7m。本層はさらに7層に細分できた。各層ともに概ね平坦を成すが、一部畦畔と推測される高まりも確認した。なお、本層は細分した上位の地層ほど、踏み込みによる地層の乱れが生じており、中には牛馬のものと推測される変形構造も見える。

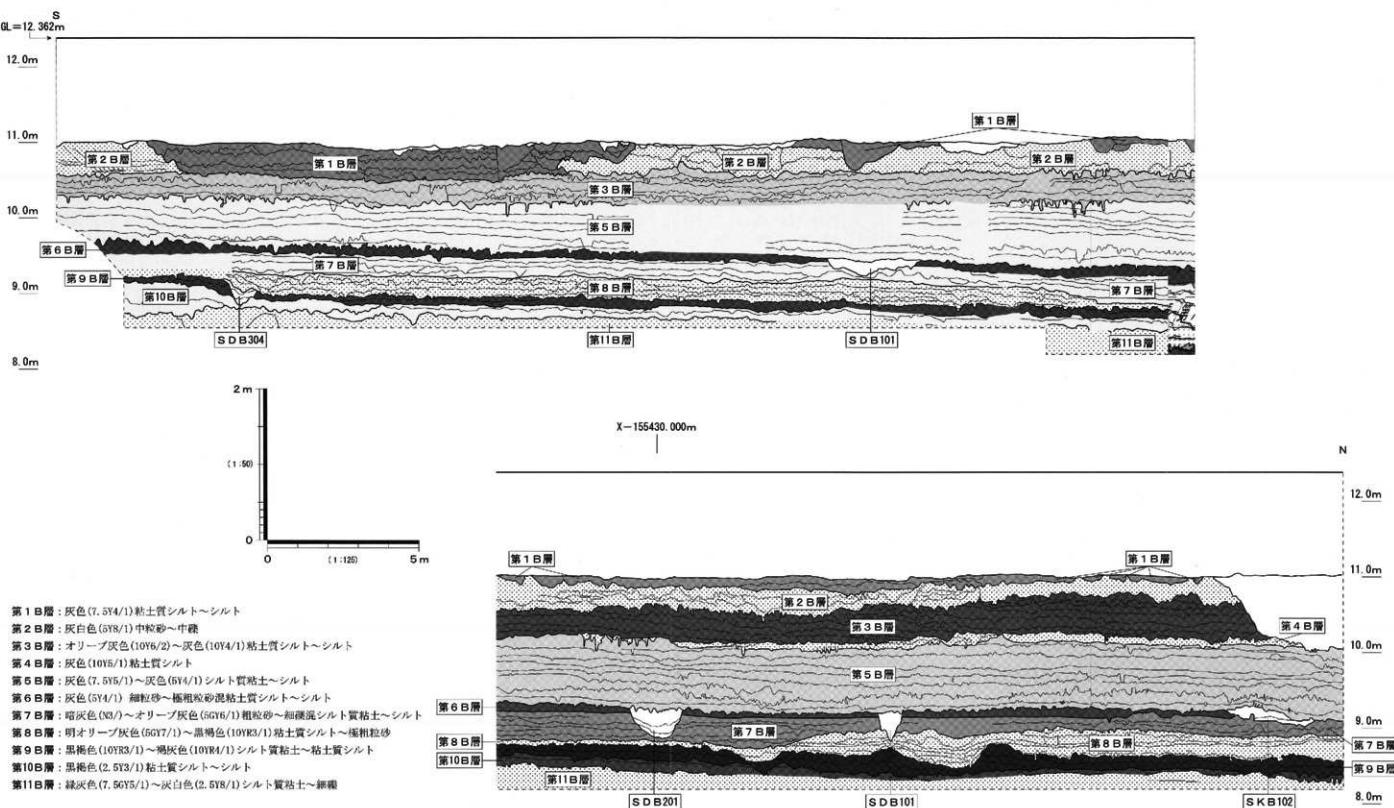
第4B層：灰色(10Y5/1)粘土質シルト

明オリーブ灰色(2.5GY7/1)～灰白色(2.5Y8/2)シルトがラミナ状に介在する河川堆積物で、浅く横長のトラフ型斜行ラミナが発達している。B区の中央～北部にのみ分布。

第5B層：灰色(7.5Y5/1)～灰色(5Y4/1)シルト質粘土～シルト

炭化物や炭酸カルシウム塊(1～2cm大)が混在する、古墳時代後期～中世頃の水田耕作土で、層厚は0.8mを測る。本層はさらに8層に細分できた。この内最下層の5B-8層の上方では乾痕を確認した。下位に向かうほど、人や牛馬の踏み込みを起因とする変形構造が顕著である。本層を除去した段階で、第1面を検出した。

第6B層：灰色(5Y4/1)細粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト～シルト



第28図 B区基本層序断面図

灰白色(5Y7/1)シルトのブロック土(1 cm 大)が混在する、弥生時代中期頃の水田耕作土(一部土壤化層)である。本層は、南が高く、北に向かうに従い高度を下げている。本層上面が第2面である。

第7B層: 暗灰色(N3/)～オリーブ灰色(5GY6/1)粗粒砂～細礫混シルト質粘土～シルト
粘性の強い水田耕作土で、弥生時代中期に比定される。層厚は0.3mを測る。本層はさらに3層に細分できた。細分した地層の内、下位については1～3 cm 大の攪拌に伴うブロックが顕著である。

第8B層: 明オリーブ灰色(5GY7/1)～黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト～極粗粒砂
層厚0.5m前後を有するシルト優勢の河川堆積物である。調査区全域で確認できた。ラミナ構造が発達している。一部、踏み込みに伴う変形構造が認められる。

第9B層: 黒褐色(10YR3/1)～褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土～粘土質シルト
植物遺体や炭化物、炭酸カルシウムの混在する水田耕作土である。概ね弥生時代前期に帰属することが推測される。調査区全域で確認した。層厚は0.2m前後である。

第10B層: 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト～シルト
極細粒砂のブロック土(2～3 cm 大)が混在する攪拌の顕著な弥生時代前期頃の水田耕作土である。概ね調査区の全域で確認できた。本層はさらに2層に細分できた。本層において第3面を検出した。本層は、概して南が高く、北に向かうに従い高度を下げている。これは、下位の第11B層の影響が大きい。

第11B層: 緑灰色(7.5GY5/1)～灰白色(2.5Y8/1)シルト質粘土～細礫
北方ではシルト質粘土が優勢で、南方に向かうにつれて砂質へと変化する河川堆積物である。調査区の南端では自然堤防と推測される大きな高まりを形成している。この高まり部分では、土壤化の進行が著しい。第10B層とともに、上面において第3面を検出した。形成時期は縄文時代晚期～弥生時代前期と推測される。

第2節 検出遺構と出土遺物

第1面(古墳時代中期以降)

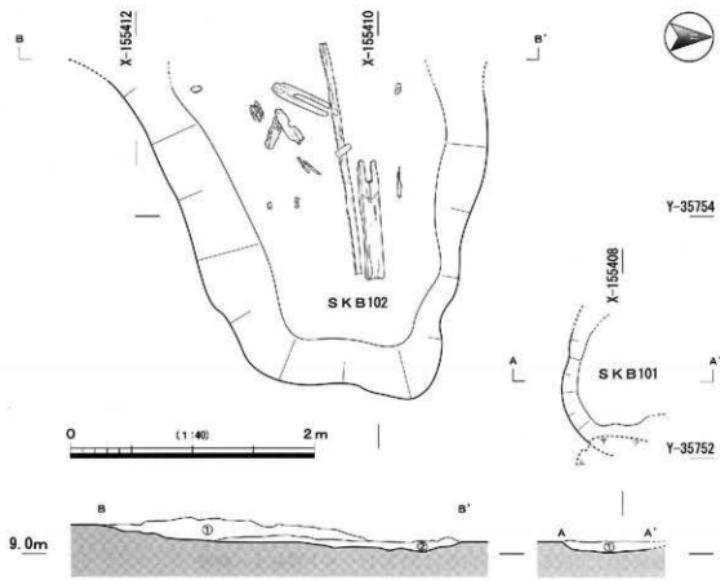
古墳時代後期～中世にかけて連綿と営まれた水田耕作に伴う攪拌層(第5B層)を除去し、精査、検出した南高北低の地形を有する調査面である。本來の遺構基盤面は攪拌により削平を受けた可能性が高く、不明である。したがって、第5B層内検出遺構面と呼称すべき調査面である。土坑2基(SKB101・102)と溝1条(SDB101)を検出した。

SKB101

II-1E区検出の隅丸方形～橢円形を呈する土坑である。本遺構は、北部分が調査区外に伸びてゐるため、全容は不明であるが、概ね東西方向に主軸を有する可能性が高い。検出規模は、長軸0.85m以上、短軸0.75m以上である。断面形状は浅い皿状を成し、深さは0.1mである。埋土はブロック上の単層である。出土遺物はない。

S KB102

II-1E・2E区検出の不定形な平面形状を成す土坑。本遺構の西部は調査区外に続くため全容は不明であるが、概ね東西方向に主軸を有する。検出規模は、長軸が2.38m以上、短軸が3.12m



SKB101 ①: 墓灰色 (N1) 植物粉砂～2m大粒砂粗粘土質シルト～シルト (灰色 (10Y5/1) 粘土質シルト～シルトブロック (3～8cm大) 在る)

SKB102 ①: 灰色 (7.5Y4/1) シルト質粘土

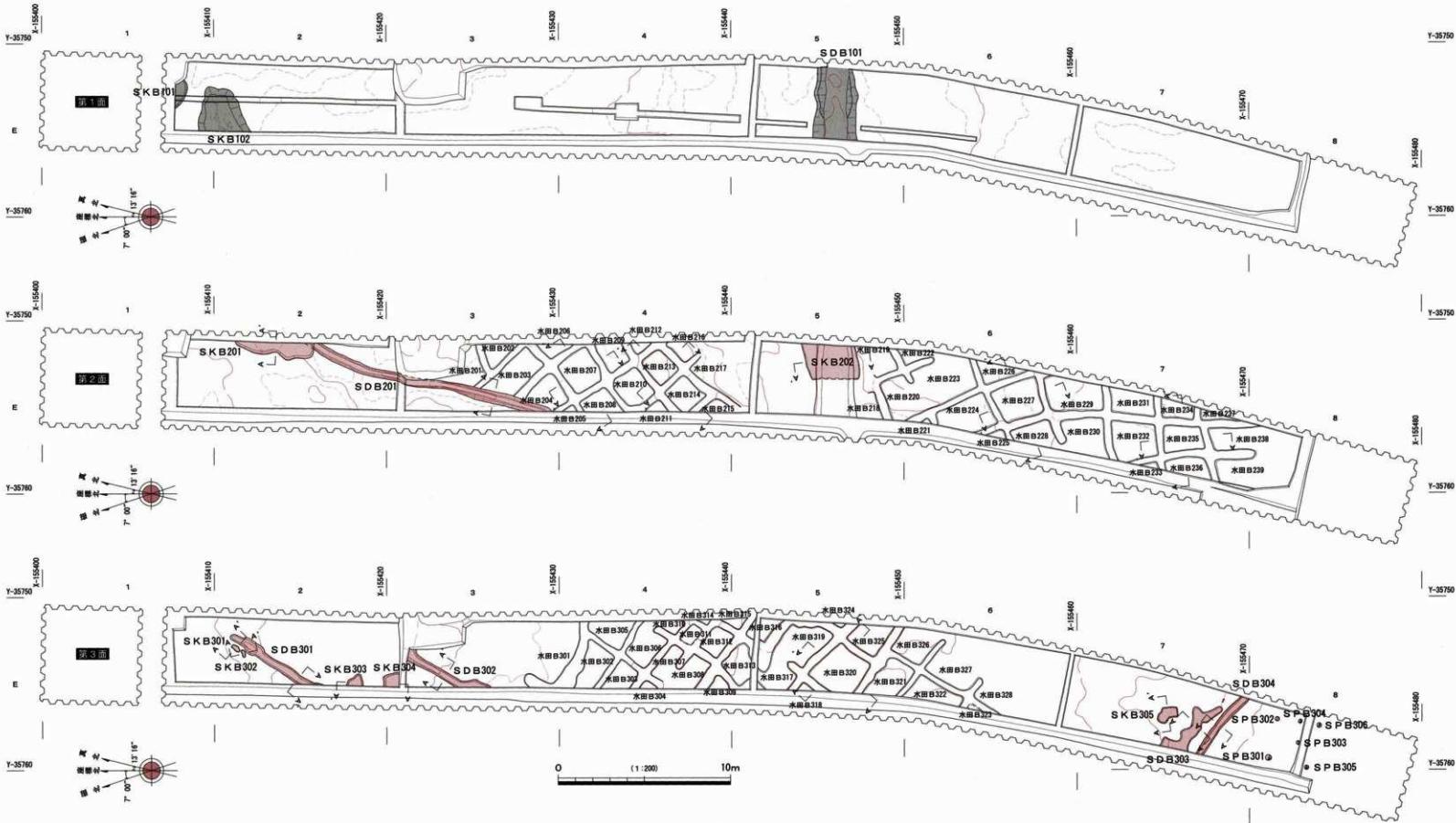
②: 灰色 (5Y4/1) 植物粉砂～極細粒砂質シルト質粘土～粘土質シルト

第29図 SKB101・102平・断面図

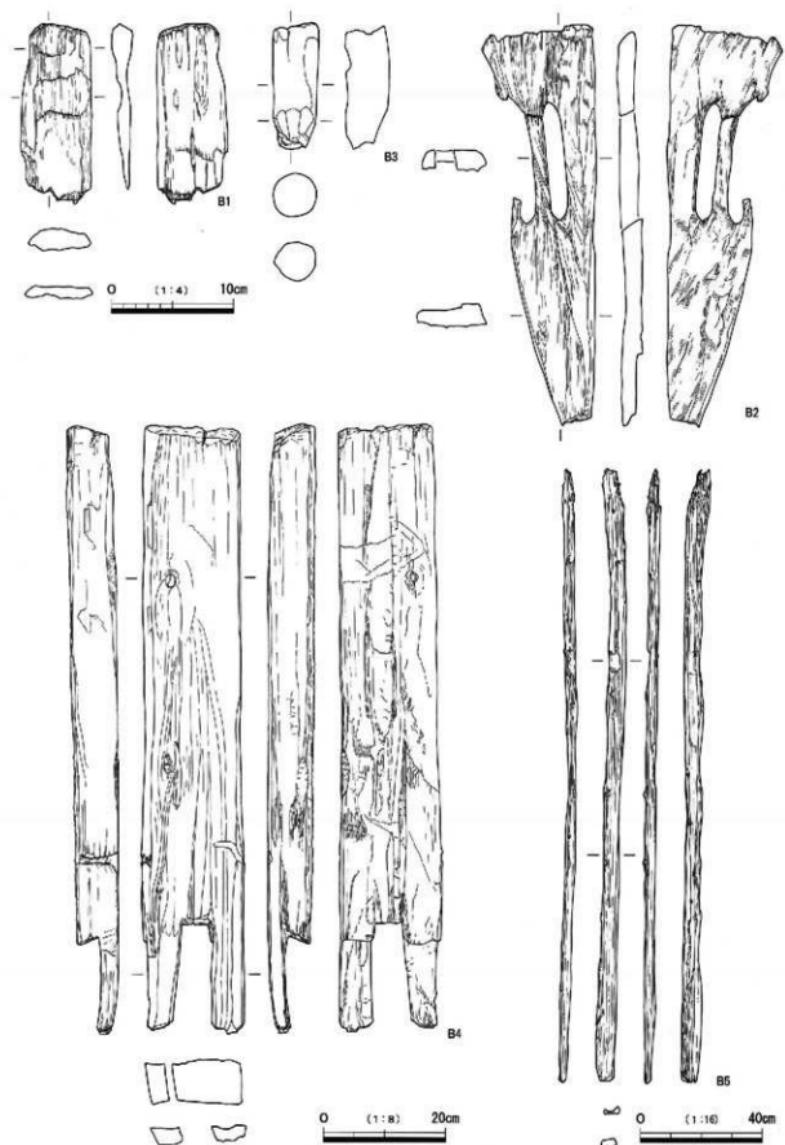
で、断面形状は浅い皿状を呈し、深さは0.2mと浅い。埋土は2層の泥状の堆植物から成る。遺構内からは木製品(B1～B5)が出土した。木製品は、加工が施されており、建築部材の可能性が高い。B1は薄い板状の木製品(幅約6.0cm、長さ15.0cm以上、厚さ約1.5cm)で、片面には溝状の浅い溝みが形成される。B2(最大幅約9.0cm、長さ33.0cm以上、厚さ約1.5cm)には柄穴のような梢円を呈した穴(幅約1.5cm、長さ約9.5cm)が2個見える。B3は杭状の木製品(径約3.5cm、長さ9.5cm以上)の先端と推測される。先端は銳利な刃物状の道具により削られている。B4は幅約16.5cm、長さ100cm以上、厚さ約7.5cmの角材の一端に2枚柄(幅約5.0cm、長さ17.5cm以上)を有する木製品である。大型の個体であることから、建築部材の可能性が高い。B5は幅約6.0cm、長さ220cm以上、厚さ3.0cmを測る、薄く長い木製品である。いずれの木製品にも出土状況に規格性を見出すことは困難である。付近より投棄された木製品と推測される。

SDB101

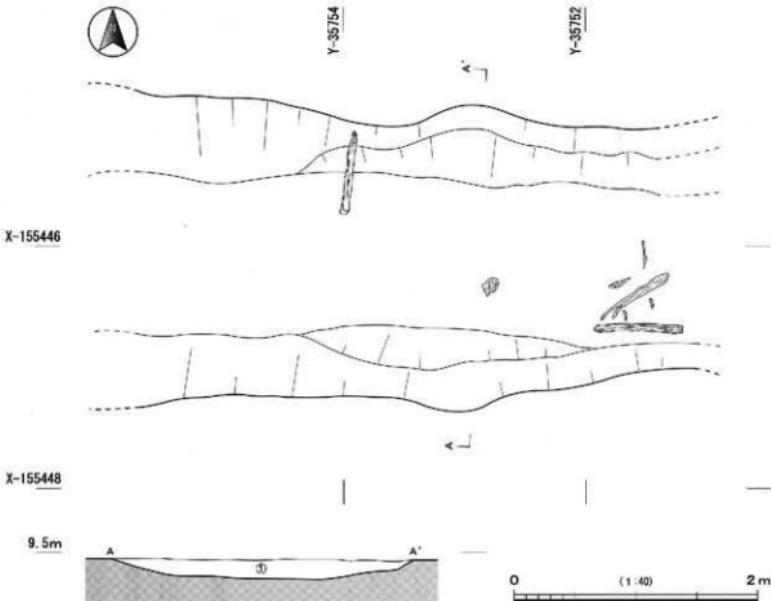
II-5E区検出の東西方方向に伸びる溝である。本遺構は、東部と西部が調査区外に広がるため、全容は不明。検出規模は、長さ4.6m以上、幅2.5mを測る。断面形状は浅レンズ形を呈し、深さは0.3mである。埋土は単層で、ブロック土が充填されていた。



第30図 B区第1~3面平面図



第31図 SK B 102出土遺物



①: 灰色(10Y4/1) 植粗粒砂~2mm大粒砂粘土質シルト(暗灰色(9Y3/1)) 粘土質シルトブロック(2~3cm大) 在在

第32図 SDB 101平・断面図

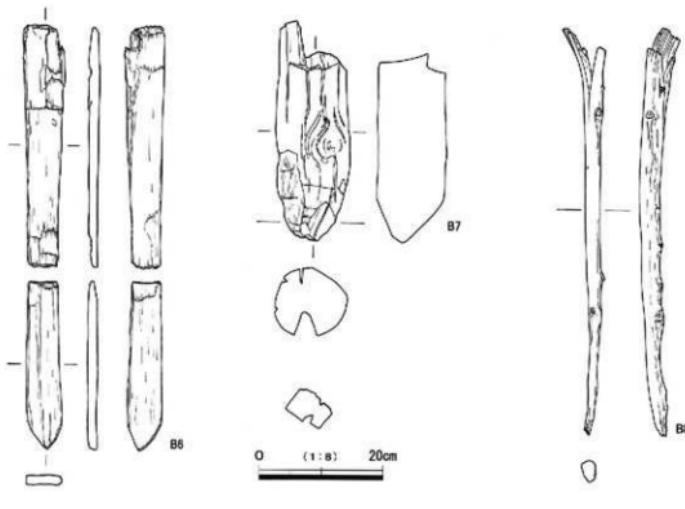
遺構内からは加工の施された木製品(B6～B8)の出土を見た。B6は幅約5.0cm、長さ70cm以上、厚さ約1.5cmの板状の木製品で、一端を鋭利な刃物状の道具にて山形に加工している。B7は杭状の木製品(径約6.0cm、長さ15cm以上)の先端部分と推測される。B8は長さ70cm以上の木材。加工痕は確認できなかった。SKB102の場合と同様、木製品の出土状況に企画性は認められなかった。付近より投棄された木製品であろう。

第2面(弥生時代中期)

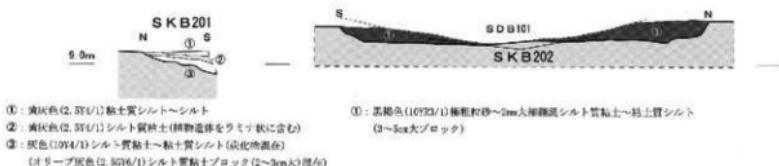
弥生時代中～後期に比定の水田耕作土である第6B層を除去し、第7B層上面を精査、検出した調査面である。第1面同様、概ね南北高低の地形を形成するが、北部では自然堤防状の高まりが存在する。本米の遺構基盤面は攪拌により削平を受けた可能性が高い。弥生時代中期と推測される土坑2基(SKB201・202)、溝1条(SDB201)、水田39筆(水田B201～239)を検出した。

SKB201

II-2E区検出の土坑である。本土坑は、東部分が調査区外に伸びているため、全容は不明であるが、概ね南北方向に主軸をもつものである。検出規模は、長軸4.60m、短軸0.55m以上を測る。断面形状は浅い皿状を成し、深さは0.17mである。埋土は3層から成る。このうち上位2層はラ



第33図 SDB 101出土遺物

第34図 SKB 201・202断面図 ($S = 1/40$)

ミナ構造の発達した泥状の堆積物、最下位はブロック土である。出土遺物はなし。

SKB 202

II-5 E区検出の土坑である。本土坑は、東部分が調査区外に伸び、また上面の大部分をSDB 101に切られるため、全容は不明である。検出部分から、南北に主軸をもつ長方形～平行四辺形を想定したい。検出規模は、長軸3.00m、短軸2.00m以上を測る。断面形状は浅い皿状を成し、深さは0.2mである。埋土はブロック土の単層で、出土遺物はなし。

SDB 201

II-2 E・3 E区検出の北東～南西方向に伸びる溝である。本溝は、北東部分と南西部分が調査区外に伸びているため、全容は不明。検出規模は、長さ14.0m以上、幅0.65mを測る。断面形状は椀状を成し、深さは0.18～0.25mである。埋土はラミナ構造の頗著な3層の自然堆積物から成る。

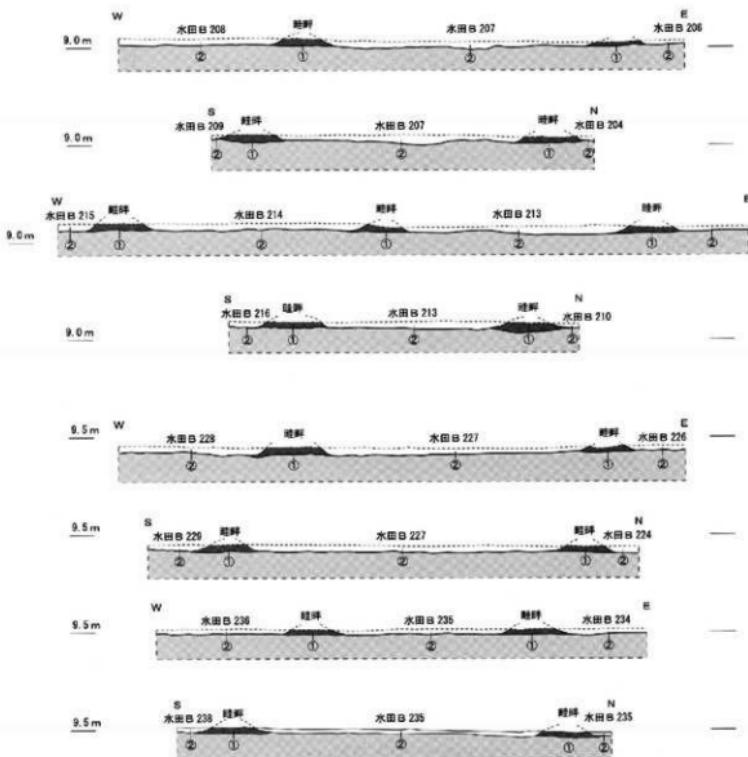
出土遺物はなし。本溝の底面高を見ると、北東から南西に向かって高度を減じていることから、水の流れも北東から南西に向かっていたことが想定できる。本溝の北側には、本溝に平行する自然堤防が存在する。したがって、本調査区第2面における最も標高の低い地点に構築された溝と言える。

水田B 201~239

本調査区の中央～南部(II-3 E ~ 7 E区)において、39筆以上の水田を検出した。水田は、幅0.3m、高さ0.03mの規模を有する、ほとんど痕跡しか留めない畦畔により区画されていた。水田



第35図 S D B 201断面図(S = 1/40)



第36図 水田B 207・213・227・235断面図 (S = 1 / 40)

は、概ね南西-北東方向に主軸をもつ長方形を呈するもの(水田B201~221)と、南東-北西方向に主軸をもつもの(水田B222~239)に分類できる。水田1筆の規模は、長軸が1.5~2.5m、短軸が1.0~2.0mである。水田1筆あたりの面積は、最小で2.38m²(水田B213)、最大で5.0m²(水田B227)である。水田の検出高度を見ると、南東に位置する水田B238がT.P.+9.6mと最も高く、北西に向かって徐々に低くなる。比高差は0.6mである。畦畔は、この比高傾斜に対して並行に伸びるものと直行するものが認められ、両者が交わり、区画された部分が一筆の水田となる。水田面の高低差からは、水田への取水が本調査区の南東方向から行われたことが容易に想定できる。一方、最も標高の低い位置には、先述したSDB201が北東-南西方向に伸びているが、この溝が、各水田を回った水を集め、排水するために機能していた可能性を指摘しておきたい。なおSDB201の北には自然堤防が存在することから、一連の水田は、この自然堤防で分断されていることが明らかになった。本水田群の上位には、後世の水田耕作土層が堆積していた。従って、本来存在したはずの畦畔等は、いずれも削平を受けており残存していない。しかしながら、上位の水田耕作土を除去し、平面精査を行ったところ、水田耕作によって形成された土壤の内、著しく攪拌を受けた、若干軟らかくなっている部分と、それほど攪拌を被っておらず、硬く縮まった部分で明瞭な差異を確認できた。つまり、前者が水田耕作土部分で、後者が畦畔部分と考えられる。

第3面(弥生時代前期)

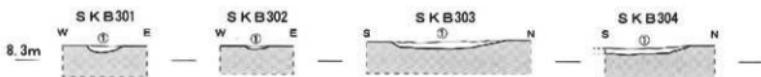
弥生時代中期に比定の水田耕作土である第9B層を除去し、第10B層上面を精査、検出した調査面である。やはり第1・2面同様、概ね南北の高低差を形成している。特に調査区の南端には自然堤防状の高まりが認められ、安定した土壤化層が形成されている。なお本来の造構基盤面は、上位の水田攪拌層である第9B層により削平を受けた可能性が高い。弥生時代前期と推測される土坑5基(SKB301~305)、溝4条(SDB301~304)、柱穴6個(SPB301~306)水田28筆(水田B301~328)を検出した。

S KB301~304

II-2E・3E区で検出した土坑群である。平面形状は不定形なものが多い。埋土はブロック土の単層で、植物遺体を多く含んでいる。一部、獸骨と推測されるものも混在していた。深さはいずれも0.1m未満と極めて浅い。出土遺物はなし。

S KB305

自然堤防状の高まりを形成するII-7E区で検出した土坑である。平面形状は不整形な椭円形に近い。断面形状は浅い皿形を呈し、深さは0.06mを測る。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。



①:暗灰色(Nd)・極粗粒砂・薄層泥灰土質シルト・シルトブロック(2~3cm大)・淡黄色(GY7/3)・シルトブロック(2~3cm大)・混在・(植物遺体混在)

第37図 SKB301~304断面図(S=1/40)

S D B 301・302

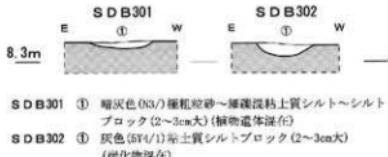
II-2 E・3 E区で検出した南西-北東方向に直線的に、ほぼ平行して伸びる溝群である。検出規模は、いずれも長さ14.0m以上、幅0.65~0.75mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは0.18~0.25m。埋土には、S K B 301~304と同様植物遺体が多く混在する。出土遺物はなし。

S D B 303

II-7 E区で検出した南東-北西方向に直線的に、乱れながら伸びる溝である。西側が調査区外に至るため、全容は不明である。検出規模は、長さ3.6m以上、最大幅1.5mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは0.06mと浅い。出土遺物はなし。

S D B 304

II-7 E区で検出した南東-北西方向に直線的に伸びる溝である。検出規模は長さ4.1m以上、幅0.58mを測る。断面形状は椀形を呈し、深さは0.2mである。埋土は3層である。この内上位2層はブロック土、最下位は泥状の堆積物であった。最上位の埋土にはサヌカイト破片が1点混在していた。なお、この溝より南側には、自然堤防が存在する。



第38図 S D B 301・302断面図 (S = 1/40)



- S K B 305 ① 灰色(GV4/1)細緻混粘土質シルトブロック(2~3cm大)
S D B 303 ① 灰色(ST4/1)細緻混粘土質シルトブロック(2~3cm大)
S D B 304 ① 明オリーブ灰色(2.8677/1)シルト～粗粒砂帶(104/1)灰色粘土質シルトブロック(3~5cm大)
② 灰色(104/1)粗粒砂～粗粒砂混粘土質シルトブロック(1cm大)
③ 灰色(SV4/1)シルト質土～粘土質シルト(炭化物混在)

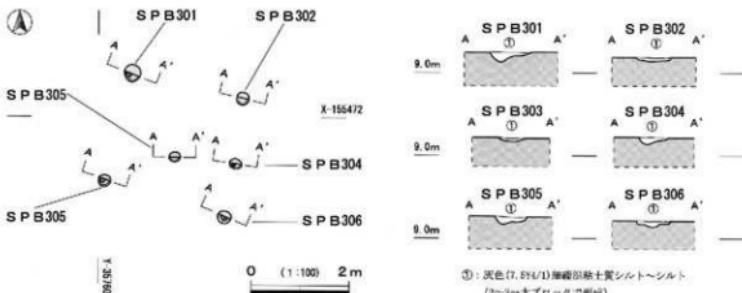
第39図 S K B 305・S D B 303・304断面図 (S = 1/40)

S P B 301~306

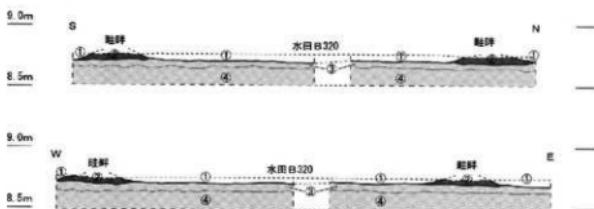
II-8 E区で検出の柱穴群である。前述したように、S D B 304の南に位置する自然堤防上で検出したものである。各柱穴は、径0.2m前後の円形の平面形状をもつ。断面形状は概ね椀形を呈し、深さは0.1m未満である。各柱穴は、ほぼ長方形に配置する可能性が考えられる。何らかの建物を構成していた柱穴であった可能性が考えられる。

水田B 301~328

調査区のほぼ中央～南部(II-3 E～6 E区)において、28筆の水田を検出した。水田の検出度は、第2面検出の水田群同様、南東が高く(T.P.+8.758m)、北西に向かって徐々に低くなる(T.P.+8.570m)。比高差は約0.2mである。したがって、水田への取水は、本調査区の南東方向から行われた可能性が高い。畦畔は、この比高傾斜に対して並行に伸びるものと直行するものが認められ、両者が交わり、区画された部分が一筆の水田となる。畦畔は、痕跡しか留めておらず、そ



第40図 SP B301~306平面図(S=1/100)・断面図(S=1/40)



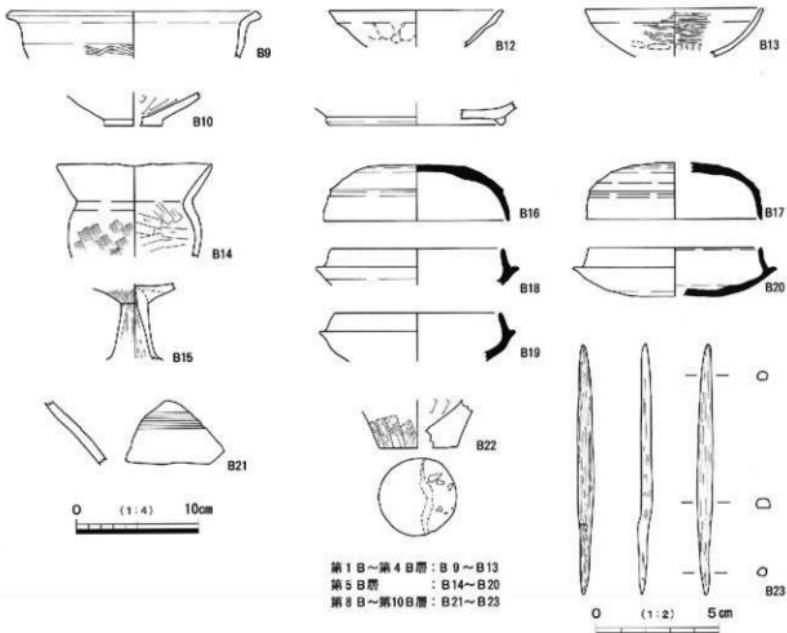
第41図 水田B320断面図(S=1/40)

の規模は、幅0.3m、高さ0.03mを有する。この畦畔により区画された水田は、概ね南西—北東方向に主軸をもつ長方形を呈するが、検出した水田の内、南端に位置する水田B322や水田B327は、南西—北東方向に主軸を有した可能性も考えられる。水田1筆の規模は、長軸が2.0~2.7m、短軸が1.0~1.8mである。水田1筆あたりの面積は、最小で0.8m²(水田B311)、最大で6.25m²(水田B320)である。なお、先述したように、本水田群の南には自然堤防が存在し、そこには建物を構成した可能性が高いSP B301~306が展開している。したがって、本水田群はこの自然堤防を境界にして、南には続かない。最後に、畦畔部分と水田耕作上部分は、見かけ上はほとんど区別がつかない。しかしながら、第2面で検出した水田群同様、両者には明らかに堆積構造的な差異を認めることができあり、それを根拠に、平面的に検出することができたことを補足しておく。

地層内出土遺物

第1B~第4B層内出土遺物(B9~B13)

B9・B10は弥生~古式土師器の細片である。この内B9は鉢の可能性が考えられる。口縁部は上外方に短く開き、外傾のふい端面を形成する。体部は肩部分の張りが認められないため、



第42図 B区地層内出土遺物

概ね半球形を呈したことが予測される。体部下位に横位ミガキが施される以外はナデ調整で仕上げる。B10は壺と推測される。小さく突出した若干上げ底気味の底部を有し、そこから大きく開く体部を形成する。体部内面には横位板ナデを施す。

B11・B12は土師器細片である。B11は底部～高台碎片(器種は不明)である。断面形状が不整台形を呈する高台を有する個体である。体部は高台の位置する付近から上外方に開き始める。B12は椀の口縁端部～体部下位である。口縁部は外反しながら上外方に短く開く。端部は丸い。調整は横ナデが主体を成すが、体部外面には指頭成形痕が顕著である。

B13は瓦器椀の口縁端部～体部下位の碎片である。口縁部は小さく外反し、端部は丸く収める個体で、外面には横位のミガキを粗雑に、内面には横位ミガキを密に施す。見込みには格子状と推測されるミガキの一部も見える。和泉型に分類され、概ね12世紀前～中葉に帰属時期を求めることが可能である。

第5B層内出土遺物(B14～B20)

B14は古式土師器の壺と推測される。口縁部は直線的に上外方に伸び、端部は丸く終わる。口径は12.6cmと小さく、体部最大径を凌駕する点が特徴的である。調整は体部外面が左斜位にハケナデを、内面がケズリを施以外は横ナデである。

B15は上師器高杯の杯底部～柱状部碎片である。柱状部と裾部の境界に屈曲点を形成しない個体である。外面には縦位ハケナデが、内面には成形時のしづり痕や横ナデが見える。

B16～B19は須恵器である。B16・B17は杯蓋。この内B16の口縁部はハコ字に開き、端部は丸い。稜は比較的明瞭で、天井部には平坦面が形成される。調整は、天井部の上2/3に回転ヘラケズリが行われる以外は回転ナデで仕上げる。II型式第3段階に属する個体と推測される。一方B17はほぼ垂下する口縁部を有し、稜はほとんど退化している。調整は天井部の上2/3を回転ヘラケズリする以外は回転ナデを行う。II型式第4段階に属する個体である。

B18～B20は杯身の口縁端部～杯部上位碎片である。この内B18・B19は、口縁部が内傾し、端部は丸く終わり、受け部は水平に短く伸びる。調整は回転ナデを確認した。II型式第4段階に属する。B20は、口縁部が外反しながら内傾気味に立ち上がり、端部には内傾のにぶい端面を形成する個体で、受け部は水平に短く伸びる。杯部は浅く、底部には平坦面が見える。調整は、杯部の下1/2を回転ヘラケズリする以外は回転ナデを行う。前二者に比して若干新しい時期に属する可能性が高い。

第8B～第10B層内出土遺物(B21～B32)

B21・B22は弥生土器の細片である。B21は壺の肩部。外面には多重直線文を施す。弥生時代前期の所産である。B22は体部下位～底部碎片(器種は不明)。底部は突出せず、平底を形成する。調整は、体部外面が縦位ハケナデ、内面が横位板ナデである。底面には粒状の压痕が見える。

B23は木製品である。長さは10.3cmを測る。断面形状は概ね円形(最大径約0.5cm)であるが、部分的に削っているところも確認できた。先端は鋭く尖る。山賀遺跡や龜井遺跡で出土したヤス木製品に類似する。

B24～32はサヌカイトの剥片である。図化はせず、写真図版の掲載に留めた。いずれも自然面はほとんど残っておらず、大きさも5cmを超えるものは認められないことから、母岩や石核ではない。産地同定は行っていないが、地理的な条件からは二上山産と考えるのが妥当であろう。

第6章 C区の調査成果

第1節 基本層序

現地表(T.P.+12.023m)下1.2m前後までは、客土・盛土(第0C層)。以下現地表下3.7m前後までの2.5m間で15層に及ぶ基本層序を抽出した。第1C層はグライ化の顕著な水田耕作土である。第2C層はシルト～細粒砂。河川堆積物である。第3C層はシルト質粘土～シルト。搅拌の著しい水田耕作土である。第4C層はシルト～極細粒砂。河川堆積物である。第5C層は粘土質シルト～細粒砂。水田耕作土である。第6C層は粘土質シルト～粗粒砂。ラミナ構造の目立つ河川堆積物である。第7C層はシルト質粘土～粘土質シルト。粘性に富む水田耕作土である。第8C層はシルト質粘土。水田耕作土である。本層上面が第1面である。第9C層はシルト質粘土～シルト。湿地性堆積物である。第10C層は粘土質シルト。下層に統く第11C層の土壤化部分に相当する。本層上面が第2面である。第11C層はシルト質粘土～極粗粒砂。ラミナ構造が発達した河川堆積物である。第12C層はシルト質粘土～粘土質シルト。湿地性堆積物であるが、上位は土壤化

が進行している。本層上面が第3面である。第13C層は細粒砂～中粒砂。シート状に薄く堆積する砂層である。第14C層はシルト質粘土～粘土質シルト。湿地性堆積物である。

第1C層：オリーブ灰色(10Y6/2)中疊混粘土質シルト～シルト

管状の酸化鉄分を含む搅拌の顕著な水田耕作土である。層厚は0.1m以上である。

第2C層：オリーブ灰色(5GY6/1)シルト～細粒砂

約0.15mの厚さを有する河川堆積物である。

第3C層：灰色(10Y4/1)～暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土～細粒砂

3～5cm大ブロック土で形成された、搅拌の著しい水田耕作土である。層厚は約0.2mを測る。本層はさらに3層に細分できた。

第4C層：明オリーブ灰色(2.5GY7/1)シルト～極細粒砂

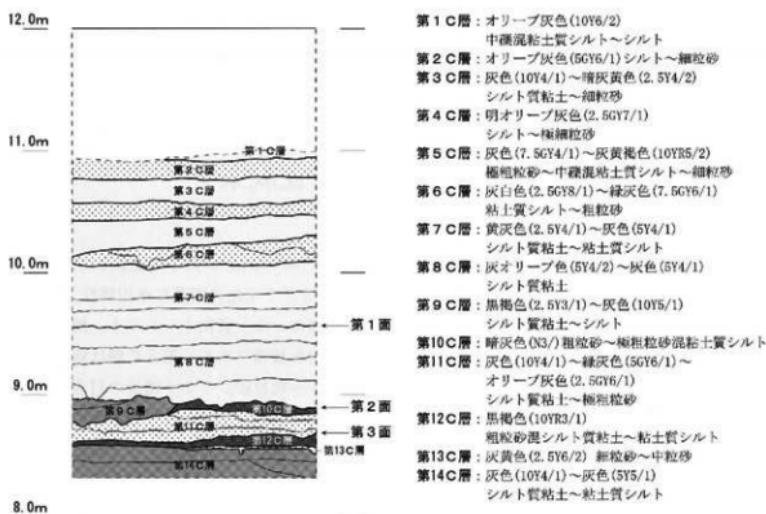
約0.2mの厚さを有する河川堆積物である。

第5C層：灰色(7.5GY4/1)～灰黄褐色(10YR5/2)極粗粒砂～中疊混粘土質シルト～細粒砂

搅拌の顕著な水田耕作土である。層厚は約0.2mを測る。

第6C層：灰白色(2.5GY8/1)～緑灰色(7.5GY6/1)粘土質シルト～粗粒砂

水平ラミナ構造の発達した河川堆積物である。層厚は約0.2m。上方は砂質優勢で、下方に向かうほど細粒砂の傾向を呈する。本層はさらに2層に細分できた。本層上方では、踏み込みに伴う変形構造を確認した。



第43図 C区基本層序模式図(S = 1/40)

第7C層：黄灰色(2.5Y4/1)～灰色(5Y4/1)シルト質粘土～粘土質シルト

粘性に富んだ水田耕作土である。層厚は約0.5mである。本層はさらに3層に細分できた。この内上位層には炭酸カルシウムが混在する。また最上層からは土師器細片が出土した。

第8C層：灰オリーブ色(5Y4/2)～灰色(5Y4/1)シルト質粘土

炭酸カルシウムや植物遺体を含む水田耕作土である。少量であるが弥生土器や古式土師器も混在する。層厚は約0.6mを測る。本層はさらに4層に細分できた。本層上面が第1面に相当する。

第9C層：黒褐色(2.5Y3/1)～灰色(10Y5/1)シルト質粘土～シルト

炭化物をラミナ状に含む湿地性堆積物である。調査区北部にのみ存在する。本層はさらに3層に細分できた。

第10C層：暗灰色(N3/)粗粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト

第11C層の土壤化部分に相当する。層厚は約0.1m。本層上面が第2面である。

第11C層：灰色(10Y4/1)～緑灰色(5GY6/1)～オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト質粘土～極粗粒砂

水平ラミナ構造が発達した河川堆積物である。層厚は約0.3m。本層はさらに4層に細分できた。この内最上層は、北方にむかうほど細粒化を強め、湿地性堆積物へと変化を遂げる。逆に南方ほど粗粒化の傾向を呈し、しかも上位は第10C層の影響で土壤化の進行が認められる。

第12C層：黒褐色(10YR3/1)粗粒砂混シルト質粘土～粘土質シルト

炭化物や植物遺体をラミナ状に含む地層である。層厚は約0.1mである。基本的には湿地性の堆積物であるが、上位は土壤化が進行している。本層内からはサヌカイト細片(同化は不可)が出土した。本層上面が第3面に相当する。

第13C層：灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂～中粒砂

シート状に薄く堆積する砂質優勢層である。本調査区の南東より供給された溢流堆積物の可能性が高い。層厚は0.02～0.03mである。

第14C層：灰色(10Y4/1)～灰色(5Y5/1)シルト質粘土～粘土質シルト

炭化物や植物遺体をラミナ状に含み、炭酸カルシウムが混在する湿地性堆積物である。層厚は0.3m以上である。本層はさらに6層に細分できた。本層内からは弥生土器細片(前期)が出土した。

第2節 検出遺構と出土遺物

第1面

古墳時代中期以降に比定される水田耕作土である第7C層を除去し、第8C層上面を精査、検出した調査面である。第8C層そのものが弥生土器や古式土師器の細片を含む水田耕作土であり、したがって、概ね古墳時代初頭～前期の水田の検出を試みたが、面積が僅少な上、既存の埋設物の影響が大きく、叶わなかった。

第2面

湿地性堆積物である第9C層を除去し、第10C層上面を精査、検出した調査面である。第10C

層は、水成層である第11C層の土壤化部分に相当する。水田耕作上に可能性も考えられる。遺構の検出は認められなかつた。

第3面

水平ラミナ構造の発達した第11C層を除去し、第12C層上面を精査、検出した調査面である。第12C層は、下位の水成層である第13C・第14C層の土壤化部分に相当する。ここでは溝を1条(SDC301)検出した。

SDC301

調査区南東隅において、概ね南東-北西方向に伸びる溝を検出した。平面規模は、遺構の北肩の一部を確認したのみであるため、全容は不明。検出法量は長さ: 1.0m以上、幅2.0m以上、深さ0.15mである。断面形状は浅いレンズ形を呈し、埋土は上位に存在する第11C層河川堆積物のオリーブ灰色(5GY6/1)シルトラミナが堆積していた。出土遺物は無し。

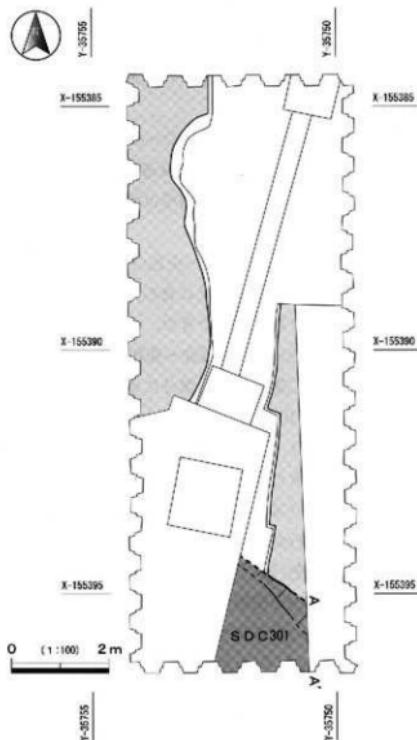
地層内出土遺物

第7C層内出土遺物(C1・C2)

土師器細片が出土した。C1は上師器小皿の細片である。口縁部は小さく外反し、端部は丸く終わる。底部は若干上げ底の可能性が考えられる。調整は、指頭成形後口縁部を横ナデ、体部はナデを施す。12世紀初頭～中葉の所産と推測される。C2は土師器杯あるいは椀の細片である。口縁部は若干内湾し、端部は丸い。調整は指頭成形後口縁部を横ナデで仕上げる。10世紀中葉～後半に属する個体と考えられる。

第8C層内出土遺物(C3)

C3は古式土師器小型器台の脚部細片。脚部は直線的に下外方に開き、端部は丸く終わる。頸部は中空で、外面には明瞭な屈曲点を形成する。調整は外面が横位ミガキを蜜に施す。頸部内面



第44図 第3面平面図

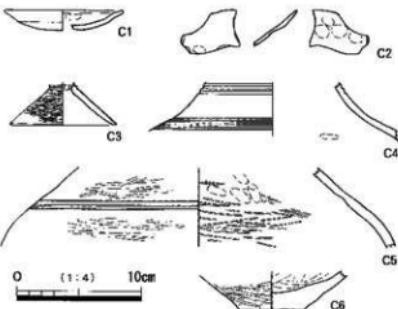


第45図 SDC301断面図 (S = 1/40)

は横位ケズリを行う。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈し、胎土は精良。精製品である。これ以外にも本層内からは、弥生時代中期(畿内第、様式)に比定される器種不明体部細片が1点出土した。器壁は薄く、外面には横位ミガキ調整を施しており、高杯杯部の細片である可能性が予測される。色調は黒褐色(10YR3/1)を呈し、角閃石を多く含んでいる。細片のため図化していない。

第14C層内出土遺物(C4～C6)

本層内からは弥生前期壺の細片が10点出土した。この内図化できたのは3点(C4～6)である。C4・5は頸部～肩部の細片。両者ともに頸部から肩部へは緩やかに移行する個体である。前者はナデ調整後、多条沈線文を2帯以上施す。後者はミガキ調整後、3条1単位の沈線文を1帯確認した。C6は体部下位～底部である。底部は突出せず、そこから大きく開く個体が付く個体である。底面は平底を形成するが、本来はドーナツ底の名残も観察できる。



第46図 C区地層内出土遺物

第7章まとめ

足掛け3年にわたる今回の調査では、田井中遺跡南東部における弥生時代前期～近世にかけての複雑に形成された堆積環境の一端を垣間見ることができた。基本的には、各時代を通じてIH大和川水系がもたらした肥沃な砂礫が堆積し、これを基盤とした複数の水田耕作土が形成される。これらの水田耕作土をすべて調査することは不可能であり、この内の主要と思われるものを選択し、平面的に検出した結果、水田耕作土に付随する遺構群の検出ができたほか、当初の予想に反して、弥生時代中期と古墳時代前期には、一部墓域として利用されていたことを明らかにした。以下では、A～C区における地層の対応関係を整理しながら、各時代を概観したい。

弥生時代前期以前

A区第13A～16A層、B区第11B層、C区第14C層、といった砂礫層がこの時代に比定される。調査区全域に分布する河川堆積物である。ラミナ構造の発達が顕著であり、側方に移動を繰り返しながら、複雑に自然堤防を形成している。この自然堤防を主とする微地形は、後世において長く認められる南高北低と呈する地形環境に大きな影響を与えている。

弥生時代前期

A区第11A・12A層、B区第10B層、C区第12C層、などの擾拌層や土壤化層がこの時代に相当する。前時代の河川堆積物を基盤層としている。B区では水田を検出しており、概ね全調査区の北部では水田を中心とした生産域として利用されていたことが予測される。一方、B区の南

端では、前代に形成された自然堤防上においてS P B301～306を検出した。これらの柱穴群は、建物を構成した可能性が考えられることから、これ以南の地域では、基本的に居住域として利用されていた可能性を指摘しておく。ただし、A区では、後世の河道によって、この時代の造構基盤面が削平を受けており、詳細を明らかにすることはできなかった。

弥生時代中期

全調査区における中部以北のB区第7B層、C区第11C層、などの水田耕作に伴う搅拌層、および南部のA区で確認した第5A・第6A・第8A・第9A層上土壤化層がこの時期に比定される。B区では、溢流堆積物と推測される非常に薄い水成層を介在しながらも複数の水田耕作土を確認しており、洪水に立ち向かいながら水田經營が行われたことが伺われる。この水田を中心とした生産域はB区を中心に展開しており、B区北部で確認した自然堤防を境に北に広がらない可能性が高い。一方、A区では、地形的に高度なこともあり、複数におよぶ土壤化層が認められる。この内の最も新しい時期に形成された土壤化層である第5A層上面では、土器棺墓A101を検出した。この付近では墓域として利用されていたことが推測される。つまり、生産域と墓域が隣り合わせに展開していた可能性が高くなかった。

弥生時代後期～古墳時代初頭

この時期については、A～C区ともに不明な点が多い。後世の水田耕作土により削平を受けたことが原因と思われる。ただし、後世の水田耕作土には、当該期の遺物の混入は相対的に少ないとから、付近において居住域や墓域が存在した可能性は低いと思われる。やはり生産域として利用されていたと考えるのが妥当であろう。

古墳時代前期

全調査区の中部以北に位置するB・C区では、地形的に低いものもある、やはり水田を中心とした生産域として利用される。一方、標高の高いA区では土壤化層である第4A層が形成され、周溝墓A101やSKA101～103のように遺物を伴う造構が構築される。SKA101出土遺物には焼成後に意図的に穿孔した土器が混在しており、周溝墓A101と合わせて、墓域として利用されていたことが予測される。

古墳時代中期以降

A区第3A層、B区第3B・第5B層、C区第7C・第8C層、などの水田耕作に伴う搅拌層がこの時期に比定される。

基本的には水田を中心とした生産期として利用される。ただし、B区ではSKB101やSDB101のように建築部材の可能性が高い木製品を投棄した遺構も認められることから、付近において古墳時代中～後期の居住域が存在した可能性も考えておかなくてはならない。

厚く堆積した水田耕作土は、概ね平坦を成しており、前代に認められた南高北低の標高差がほとんど見られない点は注目される。おそらくは自然地形を援用した水利から、これらから脱却した水利が確立されたことを可視的に示しているのではないかと思われる。条里区画の導入により、水田經營に大きな影響を与えたことが予測されるのである。

参考文献

第1章

- ・西村公助 1985「8 弓削遺跡(第1次調査)」『昭和59年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・諸 稔 2000『弓削遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要10』八尾市教育委員会
- ・藤井淳弘 1999:13.弓削遺跡(98-380)の調査|『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書』八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 2002:II 弓削遺跡第3次調査(Y G E 2000-3)』『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告3 平成13年度』八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会
- ・諸 稔 2000「9. 東弓削遺跡(98-572)の調査』『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書』八尾市教育委員会
- ・駒井正明 1997「第12章 考察 第1節 田井中遺跡の変遷」「田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次)」(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・市村慎太郎 2002「第8部 考察 志紀遺跡の変遷と周辺遺跡」「志紀遺跡(その2・3・5・6)』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・大阪空港局・八尾空港事務所『小型機のオアシス 八尾空港へようこそ』
- ・林日佐子・駒井正明・本間元樹・田坂佳子 1997『田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次)』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・本間元樹・鹿野 基編 2002『志紀遺跡(その2・3・5・6)』(財)大阪府文化財調査研究センター

第4~6章

- ・別所秀高 2002 第8部 考察 八尾市志紀遺跡における縄文時代~中世の堆積環境の変化過程とそれに対応した耕作地の開発』『志紀遺跡(その2・3・5・6)』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・米田敏幸 1990「中南河内の「布留系」土器群について」『考古学論集 第三集』
- ・川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」「考古学雑誌64巻2号」
- ・橋口 黒 2006『埋蔵文化財発掘調査報告 郡川東塚古墳第1次調査(T2001K O II) 第3節遺物編』『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告7 平成17年度』八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会

図 版



A区周辺状況(南西から)

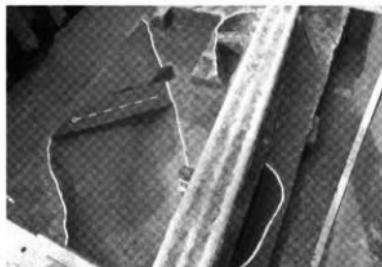


A区全景(南西から)

図版2 A区第1面



周溝基 A101全景(北西から)



西周溝：左・主体部 A101：右(南から)



主体部 A101断面(南から)



西周溝断面(南から)



東周溝断面(西から)



土器棺墓A 101振形検出状況
(南から)



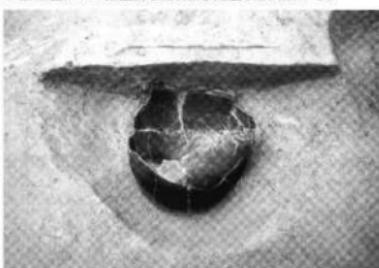
土器棺墓A 101土器棺出土状況
(北から)



土器棺墓A 101土器棺出土状況
(東から)



土器棺墓A101棺蓋除去後棺身精査状況(東から)



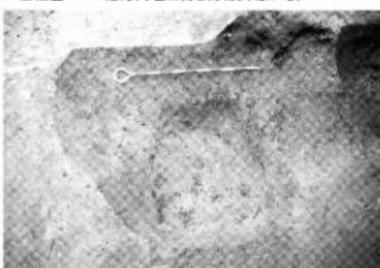
土器棺墓A101棺身精査状況(北から)



土器棺墓A101棺身内埋土除去状況(北から)



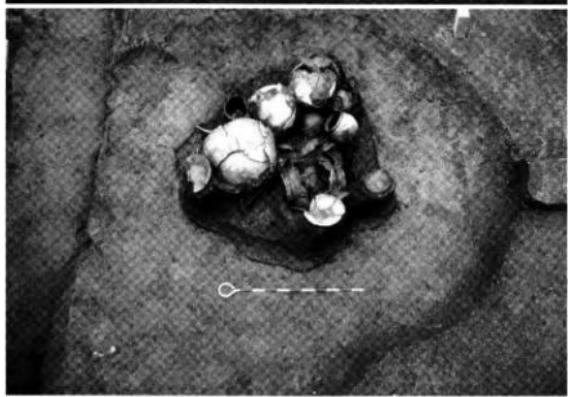
土器棺墓A101棺身内埋土除去状況(北東から)



土器棺墓A101完掘状況(北から)



SKA 101検出状況(南から)



SKA 101遺物出土状況
(1段目: 南から)



SKA 101遺物出土状況
(4・5段目: 南から)



SK A101遺物出土状況（1段目：南東から）



SK A101遺物出土状況（1段目：北東から）



SK A101遺物出土状況（3段目：北から）



SK A101遺物出土状況（4・5段目：南西から）



SK A101遺物出土状況（5段目：北から）



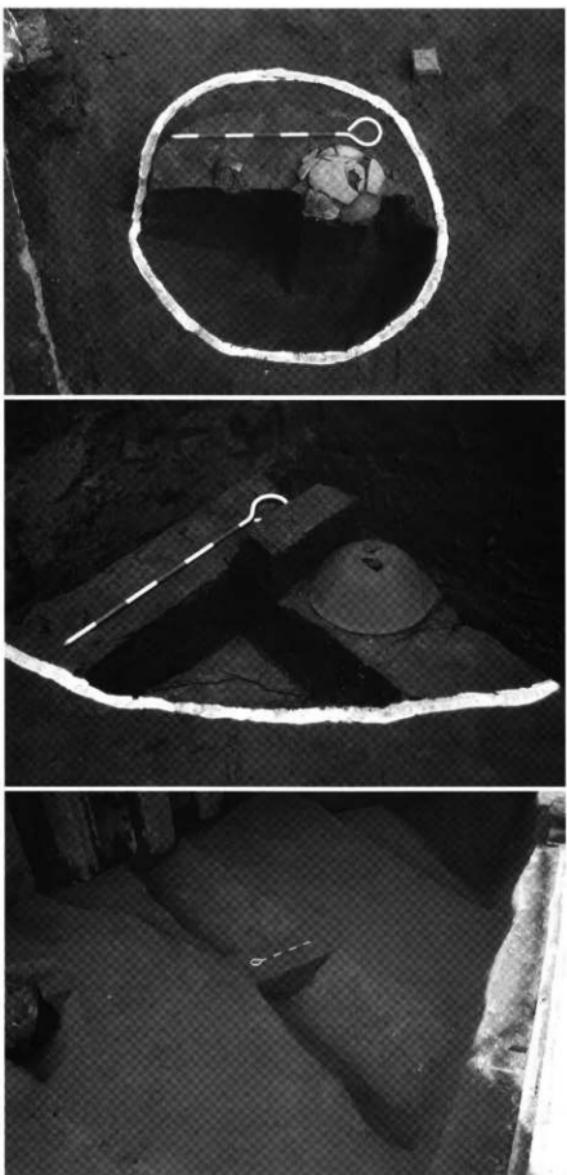
SK A101遺物出土状況（6段目：西から）



SK A101発掘状況（南から）



SK A101測量風景（北東から）



SK A 102(南から)

SK A 103(北西から)

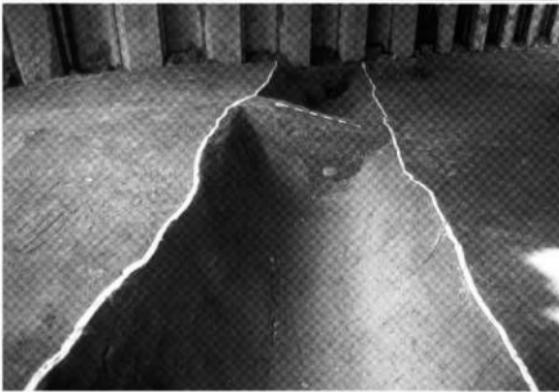
SD A 104(南東から)



SKA 201(北から)



SKA 202(北東から)



SDA 203(南東から)



NRA 204(北から)



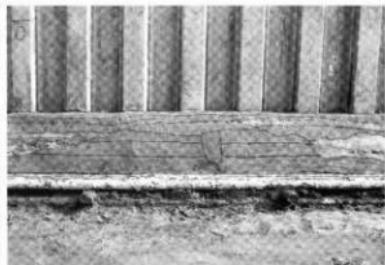
SDA 301(南東から)



NRA 401(北西から)

図版
10

A区東壁地層断面



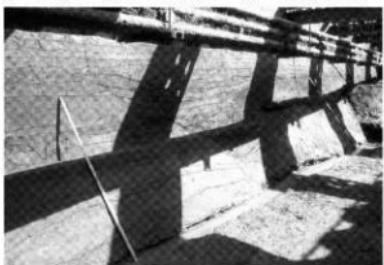
第2A・第3A層(西から)



第1A～第5A層、NRA203、第9A～第11A層(北西から)



NRA201(南西から)



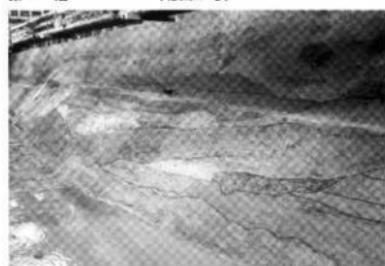
第3A～第15A層(北西から)



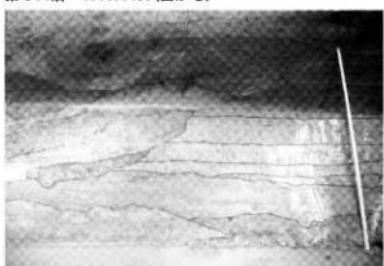
第3A層～NRA401(北西から)



第3A層～NRA401(西から)



第3A層～NRA401(南西から)



第8A～第15A層、NRA401南肩(西から)

図版 11
A区出土遺物



周清墓 A101 (A6 ~ A8 · A17 · A19 · A37 · A38)、土器棺墓 A101 (A35 · A36)



—



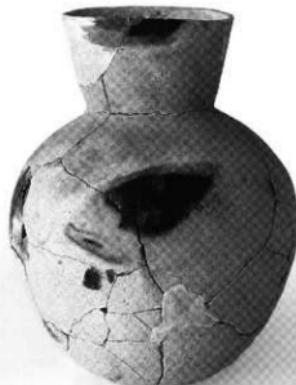
A40



A43



A46



A44



A48



A50

SKA 101



A49



A51



A53



A55



A58



A59



A60



A61



A63



A64



A65



A68



A69



A72



A73

図版15
A区出土遺物



SKA101



A89



A92



A93



A97



A98



A104



A102



A106

S K A201 (A89-A92)、S K A202 (A93)、N R A202 (A97-A98)、N R A204 (A102-A104-A106)

図版 17
A区出土遺物



A 130



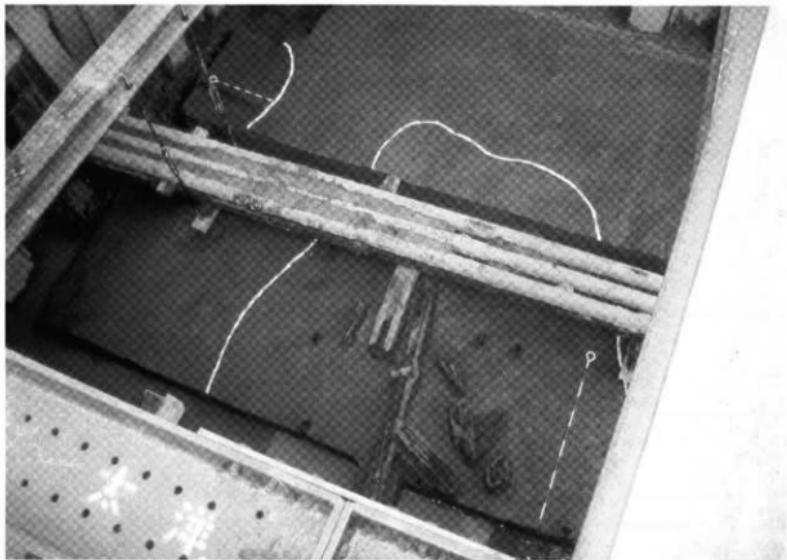
A 131



B区周辺状況(南から)



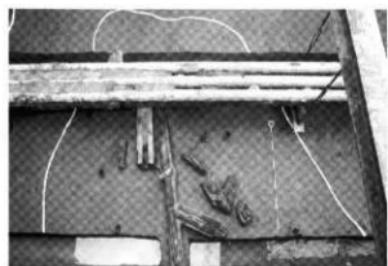
B区周辺状況(北から)



SKB 101-102(南西から)



SKB 101(南東から)



SKB 102(西から)



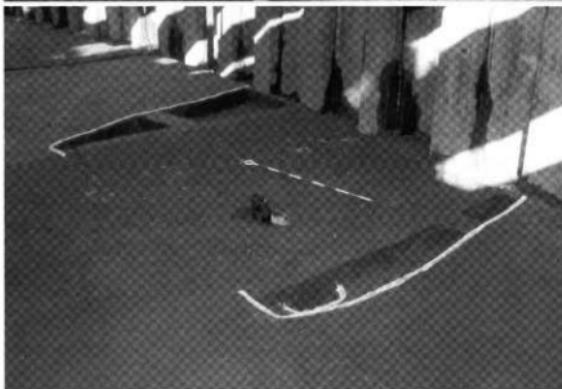
SDB 101(南西から)



SKB 102木製品出土状況(西から)



SKB201(南西から)



SKB202(南西から)



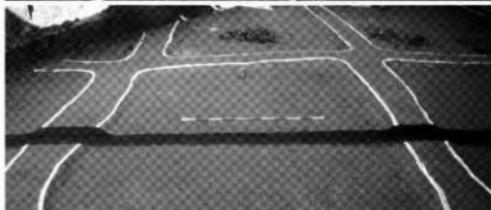
SDB201(南西から)



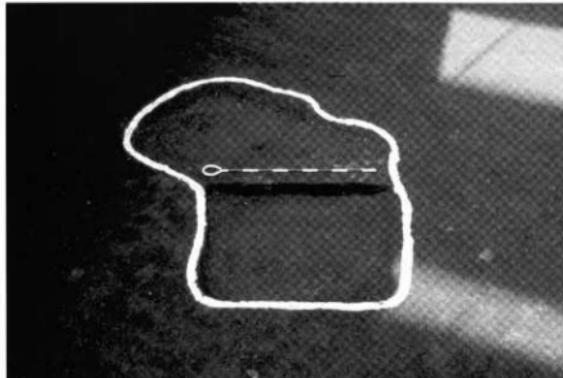
B区第2面水田検出状況(北から)



水田B213(南から)



水田B227断面(南東から)



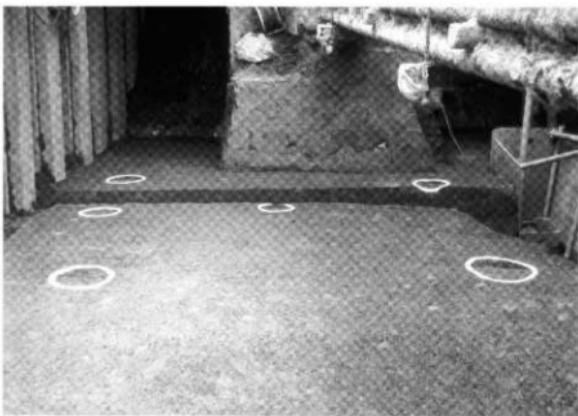
SKB305(南東から)



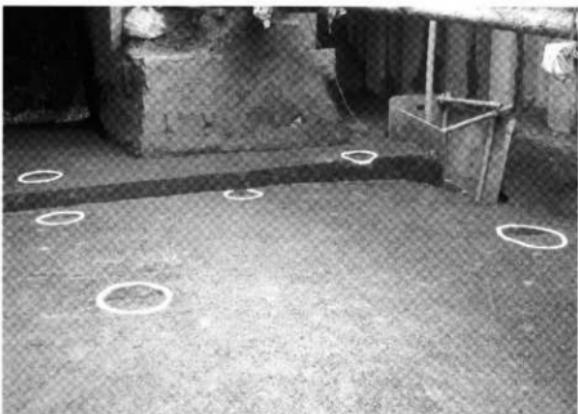
SKB305・SDB303・304
(南東から)



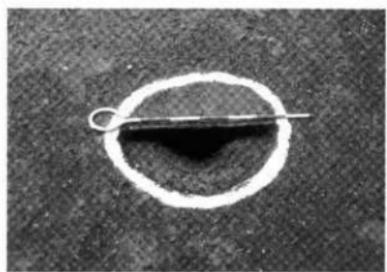
SDB304断面(南東から)



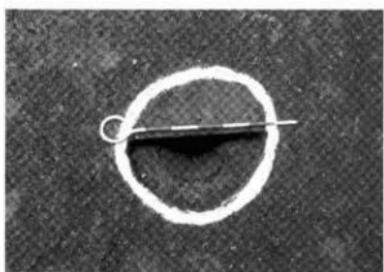
S P B301~306(北から)



S P B301~306(北東から)



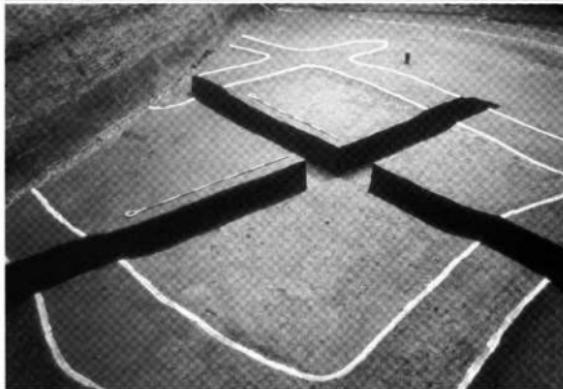
S P B305断面(南から)



S P B306断面(南から)



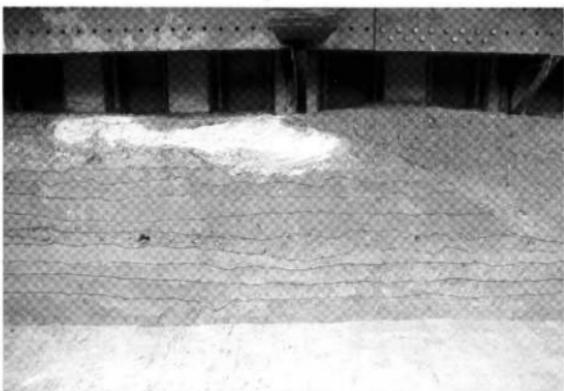
B区第3面水田棲出状況
(南から)



水田320(南から)



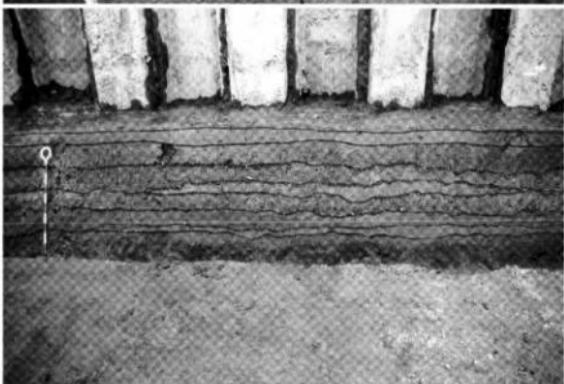
水田320断面(南西から)



B区北端西壁断面
第1B～第5B層(東から)

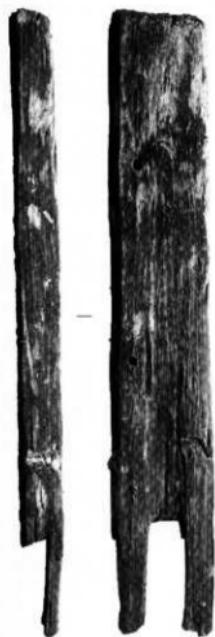
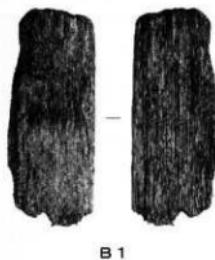


B区南端西壁断面
第2B～第5B層(東から)

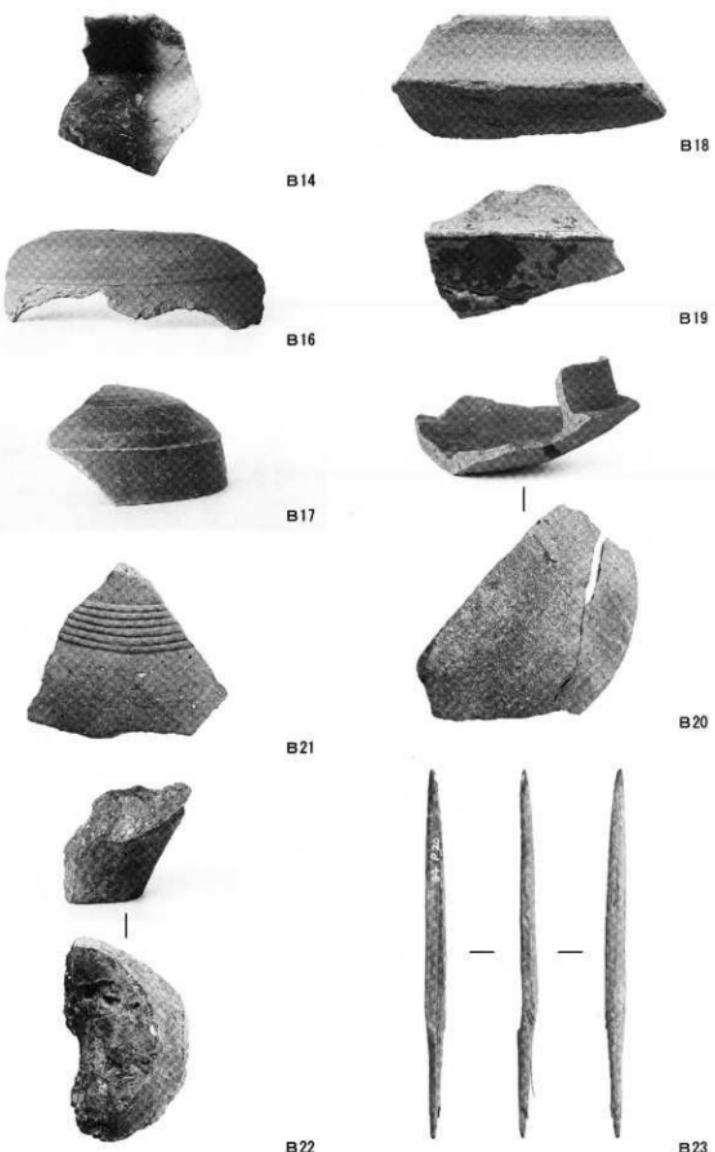


西壁断面第7B～第9B層
(東から)

図版26
B区出土遺物



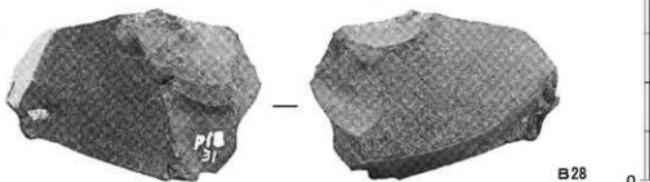
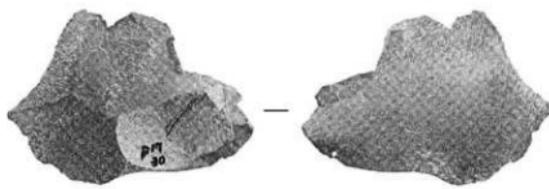
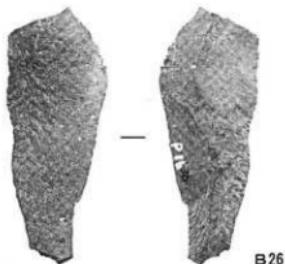
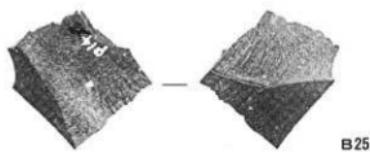
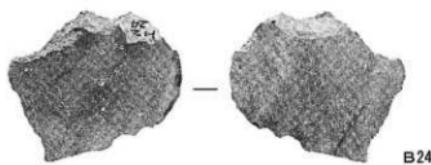
SKB102: B 1~B 4
SDB101: B 6、B 7



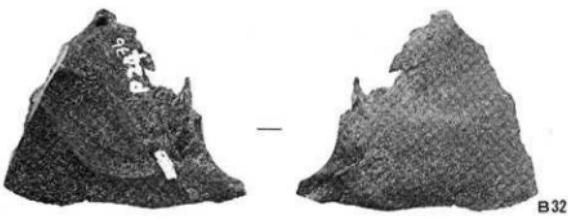
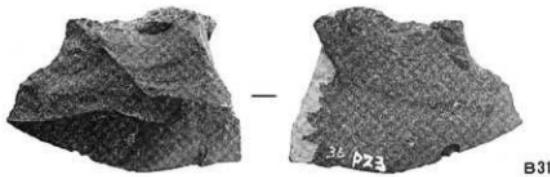
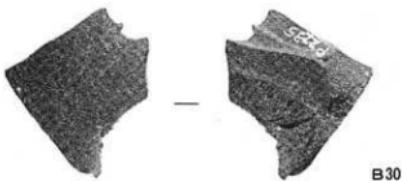
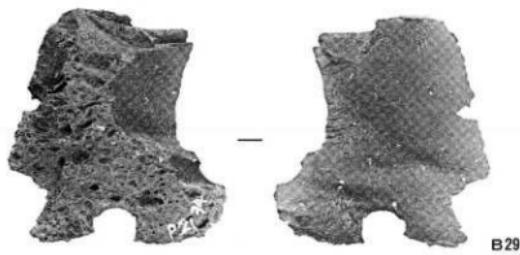
第5B層(B14・B16~B20)、第8B~第10B層(B21~B23)

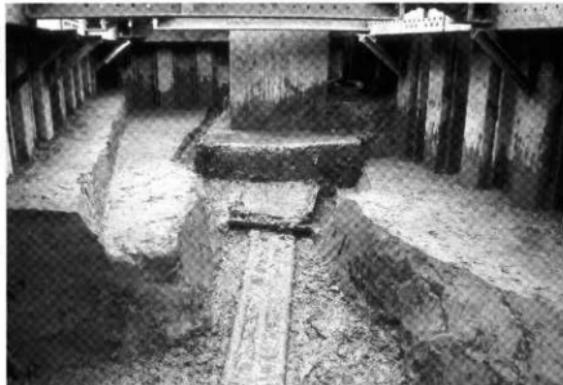
圖版
28

B区出土遺物



図版29
B区出土遺物





C区第1面検出状況(北から)



C区第2面検出状況(北から)



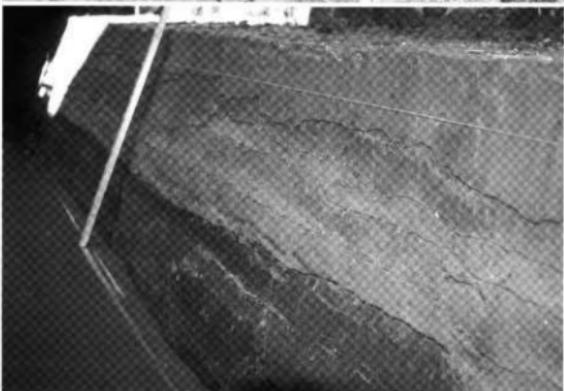
C区第3面検出状況(北から)



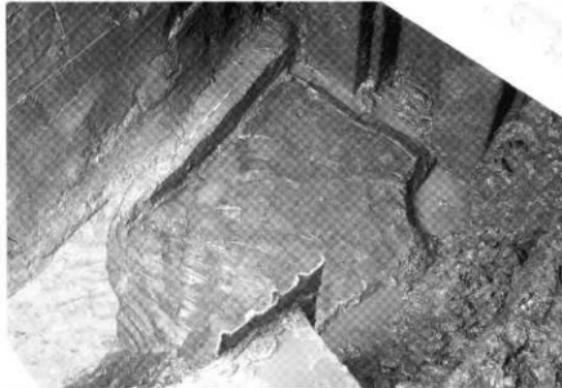
東壁断面第6C・第7C層
(北西から)



東壁断面第7C・第8C層
(北西から)



東壁断面第8C～第14C層
(南西から)



S DC301(北西から)



断面実測風景(北西から)



C区周辺状況(南東から)

報告書抄録

ふりがな	さいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかくほうこく105
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告)06
副書名	田井中遺跡第19次調査 一府道八尾道明寺線道路拡幅事業に伴う発掘調査報告-
巻次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	105
編集者名	猪口 嘉
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2007年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
田井中遺跡 (第19次調査)	大阪府八尾市幸町4丁目 地内	27212	69	35度34 分42秒	135度36 分17秒	20041221 ～ 20060731	842.6	府道八尾道 明寺線道路 拡幅事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
田井中遺跡 (第19次調査)	集落	弥生時代前期 ～近世	弥生時代前期-土坑・溝・柱穴・水田・ 流路 弥生時代中期 土器棺墓・土坑・溝・ 水田・流路 古墳時代前期-周溝墓・土坑 古墳時代中～後期-土坑・溝 古墳時代中葉以降-水田耕作土	弥生土器・古式土 器・須恵器・瓦 器・木製品・石製 品	南北に長い調査 地の内、南方の自 然堤防上において、 弥生時代中期と 古墳時代前期の 墓域を検出した。

財団法人八尾市文化財調査研究会報告105

田井中遺跡

第19次調査

—府道八尾道明寺線道路拡幅事業に伴う発掘調査報告—

発行 平成19年3月

編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会

〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2

TEL・FAX 072(994)-4700

印刷 服部印刷株式会社

〒578-0903 東大阪市今米1-16-1

TEL 072(961)-1634

表紙 レザック66 <260kg>

本文 ニューエイジ <70kg>

図版 マットアート <135kg>

